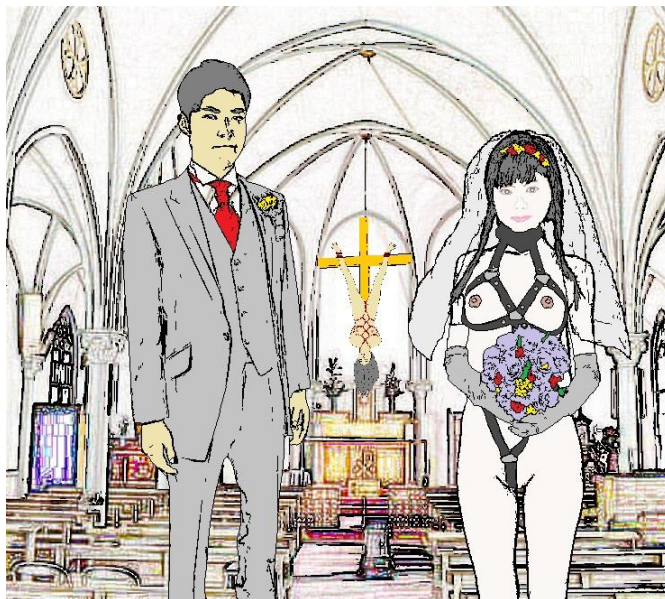


未性熟処女の強制足入れ婚



濠門長恭

目次

前書き	- 3
1. 年末は無理心中	- 4
2. お見合いは全裸	- 13
3. 初夜は強制騎乗位	- 32
4. 冬休みは隷従特訓	- 81
5. 正月明けは肉体改造	
6. 三学期は集団陵辱	
7. 誕生パーティーは究極刑	
8. 入学式は超ミニ	
9. 海水浴はスリングショット	
10. 夏休みは格闘技デビュー	
11. 婚前旅行は緊縛混浴	
12. お色直しは縄化粧	
13. 新しい義母は年下	
後書き	

前書き

昭和50年代から平成初期にかけて、性道徳は今日の緩やかさに漸近し、電マや脱法ドラッグが一般化するとともに、デリヘルやイメクラなど新しい性産業もつぎつぎと興り、SEXに関する選択肢は過去に類例を見ないほど多様となった。

猥褻に関しては、明示的な性行為は論外としても、淫毛が見えなければ猥褻ではないという基準が年齢に係わらず適用されて、福祉とか保護といった概念もなく、「その手の写真集」が公然と販売されてもいた。

その一方で、DVとか体罰に対する世間の感度は今日ほど鋭敏ではなかった。躰とか教育といった名目さえあれば、ほとんどの虐待は（若干の顰蹙は買うとしても）許容されていたのである。警察も民事不介入の原則を頑なに守り、保護を求めてきた被害者を加害者の元へ連れ戻すことさえあった。

しかも、ネット社会は個人が気軽に発信できるまでには発達しておらず、炎上や拡散を心配する必要もなかった。

つまり「やりたい放題」だったということである。

この作品はフィクションではあるが、当時ならじゅうぶん現実に起こり得た物語である。

1. 年末は無理心中

模擬試験を翌日にひかえたその夜、瀬田桃子は寝つけないでいた。テストが不安なのではない。トップ争いとは無縁だが、三年間の●学生生活で全教科とも平均点以下を取ったことはない。秋の模擬試験でも悠々の合格圏内だった。学園生活には何の不満もない●四歳の少女がかかえている悩みは、家庭の経済事情だった。

父の経営する工場が赤字続きだということは、桃子も知っている。半年前までは、仕事の関係で自宅を訪れる客は、お得意様とか銀行の営業マンといった人が月に二、三回くらいだった。今は、もっと柄の悪い男たちが、三日に一度は押しかけて来ている。休日も深夜も、おかまいなしだった。利息だけでも払えとか、つなぎ融資にも限度があるとか、大声が二階にいる桃子の耳までとどくこともたびたびだった。

私学への進学は親に負担をかけると、桃子は思う。二学期の中頃からは、就職まで考え

るようになっていた。そして三日前、まるで思ってもいなかった選択肢が桃子に示された。

その男はクロベ・ファイナンスの社長で、黒部高夫といった。半年前から出入りしている金融業者だった。がっしりした体格で、するどい目つき。母が不在のとき、一度だけコーヒーを運んだことがある。身体じゅう、とくに胸や尻を無遠慮に眺めまわされていやな思いをした。それどころか、カップを置いた瞬間に尻をぺろんと撫でられて、飛びあがってしまった。騒いだら父を困らせるのではないかと、とっさに思って悲鳴を呑みこみ、その場から逃げた。それ以来桃子は、頬の肉がたるんでいるこの男を心の中で『黒豚顔』と呼んでいる。

黒豚顔の大きな声は二階でも聞こえる。

「一千万も焦げつかせておいて、あと七百つてのは、虫が良すぎやしないかね」

「……………」

「倒産するってのなら、すればいい」

「……………」

倒産の言葉に驚いて、桃子は聞き耳を立てた。父の声は聞こえてこない。階段を下りて、

応接室の近くまでそっと行った。

「…… S 工業からの五百万円が年明けに入ってきます。それを返済にあてます」

「それでも二百足りんな。運転資金も目処が立ってないんだろうに」

「……………」

父が返事に詰まって沈黙する姿を、桃子は想像できなかつた。かわりに、父の隣に座ってうつむいている母の小さな背中が目に見えるようだった。

「もうちょっと、建設的な話をしようじゃないですか」

黒部の声が、妙にやさしくなった。

「わしの息子も専務ということになってね。そろそろ身を固めていい年頃だ。どうかね、お嬢さんを息子の嫁にもらえないだろうか」

お嬢さんというのが自分のことだと気づいたのは、黒部と父の会話がしばらく続いてからだだった。

「どなたかと勘違いされていませんか。うちの娘は●学生ですが？」

「三年生だったな。息子とはちょうどひと回り違う」

「結婚できるわけが……」

「何も今すぐじゃない。●六歳まで、一年ちょっと。婚約期間としては、長すぎも短すぎもしないと思うが、どうかね」

「いや、結婚はせめて短大くらいは出てから……」

「手形の決済に七百、運転資金に三百。破格の結納金と思うが、どうかね」

父の言葉にかぶせて黒部が言う。相手の弱みにつけこむ、ねちっこい声だった。

「それとは別に、婚約指輪のかわりに一千万の借用書を返してやってもいいんだがね」

合計二千万円で自分を買取るつもりなのだ、桃子は正確に理解した。

しばらく沈黙が続く。やがて、弱々しい抗議の声が聞こえてくる。

「お宅には若い女性がふたり、住みこんでいるそうですが」

「お手伝いと、わしの女房だ。三年前に、ふた回りも下のギャルと再婚してな」

「目のやり場に困るような服で出歩いているとか、生傷が絶えないとか、変な噂を聞いています」

「若い女性のファッションを、あんたがどう思おうと勝手だが、いい加減な噂で言いがかりをつけられちゃ迷惑きわまりない」

「いくらなんでも……娘を犠牲にはできない」

「そんなに深刻ぶって考えることもないと思うがね。案外、本人同士が意気投合ってこともある。どうだろう。とりあえずお見合いだけでも考えてみないかね」

なぜ、父はもっと毅然とした態度で黒豚顔を追い返さなかったのだろうと、それが桃子には不満だった。ふだんは厳しいけれど、肝心なところではひとり娘に甘くて、頑張り屋で頼り甲斐のある父。ずっと抱いてきた父のイメージが、大きく揺らいだ。

(二千万円かあ……)

ベッドの中で桃子はため息をついた。自分の金銭感覚で理解できない桁だった。

二千万円だろうと二億円だろうと、身売りするつもりなんかない。二千万円がないと工場が潰れるのなら、それでもいいんじゃないかと、桃子は思う。何もかも取られたって、親子三人で頑張ればなんとかなる。小さなアパートを借りて、父がどこかに就職して、母

もパートで働いて、自分も進学をあきらめて。

手形が不渡りになることで取引先にかける迷惑や、雇っている人たちを失業させてしまうことへの責任感が父を苦しめているのだとまでは、考えもおよばなかった。

静まりかえった闇の中に、階段の軋む音が聞こえた。ドアがためらいがちに開き、冷たい風が桃子の頬を撫でた。

「お父さん？」

目を開けた瞬間、黒い人影が桃子の上に崩れてきた。

「う……ぐ！」

強い力で喉を絞められて、桃子はもがいた。
(殺される！)

恐怖が心を支配した。

喉を締めつける腕を押しつけようとしたが、びくとも動かない。やみくもに腕を振りまわすと、相手の顔に当たった。

「許してくれ、桃子！」

まさかと思っていた声を耳にして、桃子は絶望と怒りでますます腕を振りまわした。父が自分を殺そうとしているなんて、信じたくなかった。

「SEXのオモチャにされるくらいなら……
いっしょに死のう。母さんもいっしょだ。ち
よっとだけ苦しいのを……許してくれ！」

頭がガンガン鳴り、闇の中に閃光が走る幻
覚を見ながら、桃子は父の悲痛な叫びを聞い
た。怒りの感情が爆発する。しかし、抵抗は
急速に弱まっていった。

(いやだ……死にたくない……助けて！)

心の叫びに応えるかのように。

激しい足音が階段を駆けのぼってきた。

「やめろ、馬鹿野郎！」

桃子の上へのしかかっていた人影が、声の
主の体当たりで吹っ飛んだ。喉が自由になっ
て、桃子は冷たい空気を貪り吸った。

不意に光が爆発して、桃子は反射的に目を
閉じる。

「上は間に合った。下はどうだ」

「駄目です。目を覚まさない」

「穏便にすませたかったが……しかたない、
救急車を呼べ」

近くと遠くで声が往復している。

桃子はおそるおそる目を開けた。最初に目
に映ったのは、床に横倒れになった父の姿だ

った。若い男が父の口に手を突っこんで、もう片方の手で腹を殴った。

「うげえええ」

アルコールの臭いがする胃液が吐き出された。その中に白い小さな粒がいくつも混じっていた。

「死なせてくれ」

這いつくばったまま、父が弱々しくつぶやいた。

「それは出来ない相談だ」

突き放した声で若い男が言う。

「生命保険なんか、とっくに解約してるんだろ。死なれちゃ一銭にもならない」

タイミング良く助けの現われた理由がわかった。この男も借金取りだった。夜逃げされないように見張っていたのだ。無理心中まで予測していたかもしれない。

男の正体が借金取りだろうと泥棒だろうと、そんなことは、桃子にはどうでもよかった。殺されるところを救ってくれた、命の恩人だった。

「おまえたちの思い通りになってたまるか。娘は、渡さんぞ」

「墓の中へ連れて行こうってのか。立派な父親だな」

若い男が父に投げつける侮蔑の言葉に、桃子は衝動的に叫び返していた。

「いやよ、わたし死にたくない！」

叫んで、そしてぞっとした。今は救われたけれど、事情は何も変わっていない。桃子は、みじめに這いつくばっている父親に目をやった。借金を返さないかぎり、この人はまた無理心中をくわだてるかもしれない。

「親に殺されるなんて、いや。絶対にいや。それくらいなら……」

喉の痛みで咳きこんだ。しばらく息をととのえてから、桃子は父親を睨みつけて言葉をつづけた。

「それくらいなら……SEXのオモチャにされてもいい。わたし、生きていたい！」

2. お見合いは全裸

その週の木曜日。桃子は父親に連れられて、ホテルのロビーにいた。格式の高いホテルだが、ロビーに人影はすくなく、飾られた観葉植物もなんとなく生気がない。

もちろん、桃子にはそんなことを観察しているゆとりはなかった。これからお見合いをして、相手が黒豚顔そっくりでも、OKの返事しかできない。

この数日、父は桃子に何度も謝っている。つまり父の心の中では、桃子の婚約は既定事実になっているのだ。母は、まだ知らない。一命は取り止めたが、絶対安静の状態がつづいていた。

総ガラス張りのドアの向こうに、ダブルのスーツを着た黒部高夫の姿が現われた。その後ろに、ブルゾン姿の若い男がいた。

(あ……)

桃子は、その男を知っていた。黒豚顔とはちっとも似ていない、細長の精悍な顔。父を一撃で吹っ飛ばした逞しい体つき。命の恩人だった。

「本日はご足労をお掛けしまして。これが娘の桃子でございます」

父が卑屈に腰をかがめて挨拶をする。

「息子の健志（たけし）です。とりあえず、座りましょうや。おい、黒部だが」

黒部がボーイに声をかけて、ティーラウンジへ案内させた。空席ばかりのテーブルのひとつに、麗々しく「黒部様／瀬田様 御予約席」と札を立ててあった。

あらためて丁重に挨拶する父親をぞんざいにあしらって、黒部がコーヒーを注文する。しばらくのあいだ、沈黙がつづいた。

黒部健志がラフなブルゾンで来てくれたことが、桃子はうれしかった。

「振袖とか、堅苦しい真似はやめときなさい。お嬢さんは学校の制服で結構ですよ」

黒部の言葉に従って、制服のジャンパースカートとジャケットを着て来た。ヘアスタイルも、いつもと同じツインテール。相手がスーツだと、大人と子供みたいで釣り合いが悪い。ぼんやりと、そんなことを考えるくらいには、桃子は緊張を解いていた。

コーヒーが運ばれて、四人の前に並べられ

る。ウェイトレスが去るのを待ちかねたように、黒部が口を開いた。

「わしは、これから約束があるので失礼する。あとは、若い者同士で好きにきなさい」

かたわらに置いていたアタッシェケースを取り上げると、カップには口もつけずに席を立った。

「あ……しかし。いや、そうですね。桃子をよろしくお願いします」

桃子の父も、あたふたと黒部を追った。

ふたりの後ろ姿を見送ってから、健志は桃子に向きなおった。

「きみも、こんな所でのんびりかまえている場合じゃないだろ？」

コーヒーカップに落としていた視線を上げて、桃子は相手の顔を見た。意味がわからなかった。

「きみの親父さん。手形の決済は明日だ。明日の午前中には結納金が手元にないと困るんじゃないかな」

健志もコーヒーには手を出さずに立ち上がった。

「婚約してほしかったら、ついておいで」

桃子の返事を待たずに歩き出す。

いきなりの展開に、桃子はうろたえた。これから映画でも観に行こうなんて話ではないことくらい、容易に想像がついた。でも、そんな覚悟は、まるきりしていなかった。

結婚はどんなに早くても、一年と二か月以上先だ。もしかしたら、そのあいだに工場が立ち直って、二千万円を返せるようになるかもしれない。そうならなくても、どうしても結婚がいやだったら家出してしまえばいい。親の保証がなければまともな就職はできないから、援交でもして稼ぐしかない。ひとりの男にオモチャにされるか、多勢の男に身体を売るか。究極の選択だけど、一年のあいだに決めればよいことだ。それくらいにしか思っていなかった。

健志はティーラウンジを出て、エレベーターに向かって歩いている。もう、覚悟も決心も関係なかった。ついて行かないなら、このまま家出するしかない。

予約席から最後の客が立ち去り、あとには誰も手をつけていない四つのコーヒーカップだけが残された。

桃子が連れこまれたのは、そのホテルで最上級のスイートルームだった。健志はさっさと革張りのソファに座り、桃子を前に立たせた。顔、胸、腰と無遠慮に視線を這わせていく。黒部高夫とそっくりの目つきだった。

「まったくのガキだな。親父と違って、俺はロリコン趣味ではないんだ」

侮辱されて口惜しい思いと、無事に解放されるかもしれない安堵と、婚約が不首尾に終わりそうな不安とが、桃子の胸を錯綜した。が、つぎの言葉を聞いたとき、桃子は自分の考えが甘かったことを悟った。

「俺をその気にさせられるかどうか、身体を見せてみる」

「あの……身体を、見せるって？」

どういう意味かは、わかりきっていた。はたして、健志は乱暴な口調で答えた。

「そこで素っ裸になれと言ったんだ。いやなら帰ってもいいぞ」

一瞬、桃子は健志を睨んだが、無表情に見つめ返す視線に射竦められてうなだれた。うつむいたまま、ジャケットを脱いだ。椅子に

広げてたたもうとした。

「手間をかけさせるな。さっさと素っ裸になれ」

桃子は広げたままのジャケットを置いて立ち上がった。決心をかためるように大きく深呼吸をしてから、布ベルトをゆるめた。背中のジッパーを引き下げ肩を抜いた。ジャンパースカートが、ふわりと足元に広がった。紐リボンをはずしてブラウスを脱ぎ捨て、ブラジャーも取った。さすがにショーツを下げるときは手が震えた。

「ソックスとローファーも脱げ」

言われるままに、桃子は髪をたばねるリボンのほかは一糸まとわぬ姿になって健志の前に立った。恥ずかしさで身体が熱い。左腕でかばった乳房までピンクに染まっていた。

「これでいいですか」

「手が邪魔だ」

胸と股間をかばっていた手を、おずおずとおろす。

「手は頭の後ろで組め」

言われたとおりにすると乳房がちょっと持ち上がった感じがした。腋が男の目にさらさ

れてしまう。

「脚は真横に開け」

その命令を実行するには、とんでもなく勇気がいった。

「そのまま、絶対に動くんじゃないぞ」

ブルゾンを脱いで、健志が立ち上がった。

「それなりに乳も膨らんで毛も生えているな。スリーサイズは幾つだ？」

「82のBカップ、ヒップは80で、ウエストは62です」

桃子は、自信を持って答えた。クラスにはCカップ以上の子もいるけど、Aの子も多いしAAだっている。なんたって、バストサイズがヒップより大きい。ウエストについては、ちょっとコンプレックスがあった。

SEXの対象として認めてもらいたい気持ちが自分にあることには気づいたが、それを異常とは思わなかった。認めてもらえなければ、勇気を出した意味がない。

健志が近づく。桃子は、自分の意思とは関係なく膝が震えるのを感じた。

「悪くない手触りだ」

尻を撫でながら健志がうそぶく。

痴漢に着衣の上から身体をさわられたことはあるが、素肌を異性の掌で撫でられた経験はない。桃子は頭の後ろで組んだ手をぎゅっと握り合わせて、そのおぞましい感触に耐えた。

男の掌が背中と腹を這い登り、乳房を包む。
「痛いっ！」

乳房を鷲掴みにされて、桃子は身をよじって逃れようとした。が、背後から抱きすくめられて身体を動かさなかった。

「姿勢が崩れたぞ」

笑いをふくんだ声が耳元にささやかれた。桃子は苦痛をこらえて背筋を起こし、両手を頭の後ろで組んだ。

「すごい弾力だな。これも悪くはないが、どうも乳を揉んでる気がしない」

桃子を羽交い絞めにしたまま左手で乳房をこねくりまわしながら、健志の右手が股間に向かった。桃子は脚を開いた姿勢のまま息を止めて、処女地が蹂躪される瞬間にそなえた。

ずぶり。いきなり指を穿たれて、桃子は苦痛の呻きをもらした。

「ほう……？」

指を浅く抜き差ししながら、健志が驚いたように言う。

「濡れてきたぞ。おまえにも、この音が聞こえるな」

音は聞こえなかったが、指の動きにあわせた粘っこい感触なら、桃子にもわかった。

「乳首も勃ってきたぞ。助平な身体だ」

粗暴な刺激から外性器を護ろうとする反応に過ぎないのだが、桃子が読んでいる少女コミックの描写に、そんな説明はなかった。

「男にさわられてうれしいんだな、おまえは」

見知らぬ男の前で裸になって、こんなことをされて濡れてしまうんだから、そうなのかもしれない。桃子は内心で、男の言葉を半ば信じてしまった。

ぞんぶんに処女地を騷った指を、健志は獲物の腹でぬぐった。

「こんなに感じるとは、バージンかどうか、怪しいものだな」

健志は指の匂いをかぎながら、羞恥に悶えている少女を侮辱した。そして、残酷な命令をください。

「ちゃんと処女膜があるか検査してやる。床

にあお向けになれ」

さすがに、桃子は息をのんだ。しかし、のろのろと身体を動かして命令に従った。

(どんなひどい目にあわされても平気だ)

桃子は自分に言い聞かせた。二千万円で処女を売るんだと思えば、援交の相場の百倍以上だ。どんなサービスでも平気だ。

健志は両脚をM字形に開脚させ、桃子に自分で膝を抱えさせた。そして、M字の中心に顔を近づけた。

「ピンク色の可愛いびらびらだな」

花卉を両手で押し開いて覗きこむ。

「ほう」

健志の息を花卉の内側に受けて、桃子はぴくんと腰を震わせた。

「左右対称の綺麗な処女膜だ。穴が小さいから、破るときは痛いぞ」

その穴に中指を押しこんで、内側をえぐるように搔き回した。

「……痛いっ」

やめてとは、頼まなかった。このまま犯されるのだと思った。

そのとき、健志とは違う声が聞こえた。

「もう始めとるのか。なかなか苛め甲斐のある子だろう」

桃子は跳ね起きて部屋の隅に逃れた。

「おや、恥ずかしいのかな。もうすぐ親子になるんだ。遠慮しなくていいんだよ」

いつの間にか、黒豚顔が部屋の中にいた。

「親父、最初から甘やかすのは良くないぜ」

健志は背を向けてうずくまっている桃子の髪をつかんで、ソファの前に引きずってきて立たせようとした。

「やだ、やめて。ひどい。こんなの、お見合いじゃない」

黒豚顔の視界から逃れようとして身をもがく桃子。

健志は膝で桃子の腹を蹴り上げた。痛みよりもショックで、桃子の抵抗が弱まった。つかんだ髪を左手に持ち替えて、右手で往復ビンタを張った。肘を曲げたままだったが、二十六歳の屈強な男のビンタは少女を服従させるに十分な威力があった。

「男同士の話が終わるまで待っている。さっき教えた姿勢で立て」

桃子は腫れた頬を押さえることも、あふれ

る涙をぬぐうことも許されなかった。

黒部が桃子の正面に座り、健志は横の椅子に座った。

「たしかに、処女だね。この年齢にしては、胸と尻は合格だと思う。でも、全体にぽっちゃりし過ぎているんじゃないかな。俺は、デブは嫌いだ」

全裸の本人を前にして、露骨な批評を健志が口にした。

「デブというほどではないぞ。処女肥りというやつだ。腰を振らせているうちに引き締まってくる」

言葉による辱めくらい平気だと、桃子は内心で虚勢を張っていた。だが、高夫のつぎの言葉には震えあがった。

「これくらいのほうが、縄もギチギチに食いこんで楽しめるぞ。この尻に鞭を叩きこんだら、きっといい音がする」

親子してサディストなのだと、初めて桃子は知った。黒部家にいる女性に生傷が絶えないと言った父の言葉を思い出した。

(でも、平気だ。明日まで我慢すればいい)

明日、手形の決済が無事にすめば、父親も

すぐには無理心中なんて考えないだろう。学校だけは卒業して……すぐ逃げてしまおう。母さんを置き去りにするのは辛いけど。

「ところで、黒部家のしきたりは教えてやったのか」

「いや、そこまでは」

「ちゃんと手順を踏まんか。小娘一匹が相手だから、どうということもないが、ビジネスで手順を間違えたら、とんでもないことになるぞ。そこに座れ」

最後の言葉は桃子に向けられたものだった。

床の上に正座する桃子を見下ろして、黒部はいよいよ本題を持ち出してきた。

「黒部家では徹底的に男尊女卑をつらぬいておる。女は男の命令に無条件で絶対服従だ。不満を言ったり逆らったりすれば、縄と鞭で厳しく躰ける。こんなふうにな」

アタッシュケースから小さなアルバムを取り出して、桃子の目の前に広げた。

「……………！」

パソコンのディスプレイを眺めているのではないかと、桃子は目を疑った。

インターネットのアダルトサイトを覗いて、

こんな画像を見たことはある。嫌悪を感じながらも、女性を虐めたい願望が男性にはあるのだと知った。けれど、女の子にだっていろんな願望や妄想がある。美少年同士のラブシーンなんて、男の子には理解してもらえない。桃子にとって、SMはボーイズラブと同じくらいのリアリティしか持っていなかった。

しかし、これは生写真だった。目の前の親子が実際に女性を虐待した証拠だった。

全裸の女性が、脚を大きく開いた姿で両手を上に吊るされていた。乳房も腹も太腿も、重なり合った赤い筋でおおわれていた。鞭の痕は無毛の股間にも刻まれていた。失神しているのだろうか。顔は垂れていて見えない。

隣の写真では、同一人物らしい女性が地面に大の字に固定されていた。全裸かもしれないが、身体の上に雪を積み上げてあるのでよくわからない。

その下の写真は、そんなにショッキングなものではなかった。後ろ手に縛られた別の女性が背後から犯されているだけだった。強姦のシーンがショッキングでないと思えるほど、他の写真は残酷だった。

「この写真と同じにされる覚悟があるなら、婚約してやってもいいぜ」

俺はどっちでもかまわないんだがなと、健志は言う。

二千万円分のサービスなんだ。桃子は自分を説得した。ここまで恥ずかしい目にあわさられて、今さら引き下がれない。きっと頭を上げて健志を振り返った。

「覚悟しています。婚約してください」

「それが、人にもものを頼む態度か！」

これまでのやさしい声色をかなぐり捨てて健志が叱った。

とっさに、桃子は自分のとるべき態度を悟った。健志に向きなおって上体を床に投げ出した。

「お願いします。どうか、わたしを健志さんのお嫁さんにしてください」

人前で全裸になったのと同様、土下座をするのも初めての体験だった。

「そこまでお願いされて断わるのは、男として不甲斐ないというものだろうな。いいだろう、嫁にしてやる」

犯されようと縛られようと、何をされても

今日だけの我慢だと、桃子はたかを括っていたのだが、その考えが甘かったことを、再び思い知らされた。

「そう結論を急ぐな」

黒部が息子をたしなめる。

「この娘が、黒部家の嫁にふさわしいか、見きわめる必要がある。今日からうちに住み込まそう」

「あの……つまり、同棲するんですか？」

事態は急展開。とんでもないことになりそうだと、桃子は怯えた。

「そんな甘っちょろいものではない」

黒部が苦笑した。

「むしろ、試験採用といったところだ。籍を入れるまでに、黒部家の家風を身体に叩きこんでやる。どうしても家風に馴染めなければ、追い出すまでだ」

つまり……結婚してからではなくて。今日から桃子を、あの写真のように扱うつもりなのだった。

「これも黒部家のしきたりで、足入れ婚というやつだ」

黒部の言葉が終わらないうちに、桃子は立

ち上がっていた。二千万円も無理心中も、どうでもよくなっていた。黒部の家に囚われて結婚まで、いや、それからもずっと、写真の女性のように虐待される運命から、逃れることしか考えていなかった。

目の前に落ちている服をひったくって、ドアに駆け寄った。ドアはわずかししか開かなかった。ドアチェーンを外そうとしているところを、肩をつかまれて引き戻された。

「服を着るあいだも待てないくらい、早くうちへ来たいのかな？」

それなら、手に持っている服だけを身に着けるようにと、健志が命じた。逆らうなら、さっそく写真と同じにしてやると脅された。

桃子が手に持っているのはジャンパースカートの制服だけだった。下着もブラウスも、ひったくったはずみで床に落ちていた。

それを黒部が拾いあげて、椅子の上のジャケットといっしょに、ゴミ箱に突っ込んだ。

桃子はそれを目で追って、それから健志を振り返って視線をはね返されて。唇を噛みしめながら、ジャンパースカートを素肌にまとった。右手をつかまれ、腰を抱きかかえられ

て、スイートルームから連れ出された。

こうなることは最初からわかっていたのだと、素足で絨毯を踏んで歩きながら、桃子はぼんやり思っていた。夜逃げや心中をされないように、徹夜で見張っていた相手なのだ。二千万円で買い取った桃子を逃がすはずがなかった。いきなり同棲させられるとまでは思っていなかったけれど、監視を付けられるか、GPS付のケイタイを持たされるか、それくらいは予想していた。結婚まで清い交際がつづくはずもないと、覚悟もしていた。いざとなったら逃げ出せばいいなんてのは、自分で自分を騙していただけだ。

そういった心理につけこんできたサディスト親子の姦計に、桃子は気づいていない。ティーラウンジにいたとき、マゾ牝奴隷として調教すると告げられていたら、その場で逃げ出していたはずだ。ホテルの部屋でふたりきりになるくらいは、裸を見られるくらいは、さわられるくらいは……ひと晩やふた晩くらいならSMだって我慢できると、少しずつ譲歩を重ねて、桃子はまるきり想像もしていなかった境遇にまで自分を追いやってしまった

のだ。

卑劣な相手を責めずに、自分が悪かったのだとあきらめてしまう。そんな考え方そのものがマゾヒスティックなのだということにも、桃子は気づいていなかった。

3. 初夜は強制騎乗位

黒部の家は、郊外の高級住宅街の一画にある。邸宅と呼ぶほうが適切だろう。周囲の宅地の四倍はありそうな広い敷地を、刑務所のように高い塀が取り囲んでいる。塀の内側には背の高い常葉樹が植えられていて、近隣のマンションの最上階からでも、絶対に内部をうかがえないような工夫がされていた。

健志の運転する車は自動開閉式のゲートをくぐって、玄関の前に乗りつけた。黒部高夫にうながされて、桃子は車からおりた。

「お帰りなさいませ」

三人の男女が、黒部親子を出迎えた。若い男と、女性がふたり。そのうちのひとりを見て桃子は、自分がとんでもない場所へ拉致されたのを、あらためて実感した。二十歳くらいだろうか。長い髪をポニーにたばねたその女性は、胸当てのついたエプロンを素肌につけていた。背中も尻も剥き出しだった。

もうひとりのショートヘアは三十歳くらい。黒いレザーのミニスカートとシースルーのブラウスだった。カーディガンを羽織っている

が、乳房は完全に透けていた。若い男は、ふつうにスーツを着ていたが、ノーネクタイで金のアクセサリーをちらつかせている姿は、ヤクザそのものだ。

車を置いたまま、黒部親子は玄関をはいった。ふたりの女性に追いこまれるように、桃子も玄関をくぐった。いちばん後ろから、若い男がついて来る。

「紹介をすませておこう。妻の冴子(さえこ)と、女中の綾香(あやか)。こいつは、うちの社員だ。女だけでは物騒だから、昼間は輪番で詰めさせている」

「冴子は、おまえの母親ということになる。冴子の命令は、俺や親父の命令と同じだと思え」

健志は継母を呼び捨てにした。

「おまえは息子の婚約者だが、綾香のほうが年上だし、キャリアも長い。間違っても、自分のほうが目上だなんて思いあがるんじゃないぞ」

ふたりの言葉を、桃子はうわのそらで聞いていた。心臓が喉元で激しく脈打っている。頭に霧がかかって、肉体から切り離されたよ

うな感じだった。そして桃子の目は、裸エプロン姿の女性に吸いつけられて動かなかった。

そんな桃子を健志がからかった。

「綾香のファッションが気に入ったようだな。残念だが、先輩と同じ格好をさせてやるわけにはいかない」

「あなたのエプロンは、これよ」

冴子が上がり框の上に丸っこい布を広げた。フリルで縁取られて、左右に紐がついていた。前掛けだけのエプロンだった。

「ここで着替えなさい」

全裸も同然の姿になればと、冴子は言っているのだった。

「あの……」

桃子は声を出したが、何を言えばいいのかわからなかった。言いたいことは、ひとつだけだ。だが、ビンタが怖かった。

「やっぱり、やめます。婚約してくれなくていいです。帰してください！」

最後は半泣きになっていた。

おそれていたビンタは、飛んでこなかった。かわりに冷笑を浴びせられた。

「もう、おまえは黒部家の人間だ。夫の命令

が聞けないというなら、身体に教えてやるぞ」

いつのまに取り出したのか、健志はプラスチック製の細い笞を桃子の目の前で振った。

ひゅん！

空気を切り裂く音におどされて、桃子はしゃくりあげながら背中中のジッパーに手を伸ばした。が、玄関の隅にひかえている若い男を見て、手を止める。

「さっさと着替えろ」

笞が、桃子の肩をピシリと打った。

「は、はいっ！」

たいした痛みではなかったが、桃子の反抗心も羞恥心も奪い去るのにはじゅうぶんな効果があった。桃子は学校の制服を脱いで、エプロンを腰に巻きつけた。

「よし。素直になったな。女には身体に教えてやるのが一番だ。俺たちが留守のあいだ、戸田に迷惑を掛けるんじゃないぞ」

つぎは何をされるのかとおびえていた桃子だったが、黒部親子がまた外出すると知って、拍子抜けした。

ほかの三人といっしょに裸エプロンで庭に並んで黒部親子を見送ったあと、桃子は冴子

の案内で家の間取りを教えられた。

玄関をはいってすぐの応接室と仕事の事務室。黒部の書斎と健志の居室があって、廊下をまっすぐ奥へ進むと、リビングルームとダイニングキッチン。リビングルームは桃子の家の二倍以上の広さがあった。廊下を左へ曲がると、だだっ広いバスルーム。

「トイレは下にふたつと、二階にもあるけど、勝手に使っちゃ駄目よ。必ず、殿方のお許しをもらいなさい」

短いエプロンの裾も剥き出しの乳房も気にはなったが、隠す努力はあきらめていた。女同士という安心感からではなく、冴子が怖かったからだ。

二階はベッドルームがふたつと、冴子たちの小部屋があった。

「おまえの部屋も支度してあるわ。まあ、物置になるだけなんだけどね」

健志がその気になったときは、ベッドルームで寝ることになると、冴子は言った。その気にならないときでも自分の部屋で寝られない理由までは、言わなかった。

最後は下へもどって、バスルームとは反対

側にある部屋を見せられた。

「……………！」

部屋に一步は行って、桃子は息をのんだ。リビングルームと同じくらいに広いその部屋いっぱい、大型犬の檻や磔柱、首のない木馬のようなものが据えられていた。壁にも、さまざまな器具が掛けられていた。何メートルもありそうな鞭、先が幾つにも分かれた鞭、幅の広い革の鞭。竹刀や木刀もある。手錠や足枷、革のパンティと革紐が組み合わさった衣装。桃子には使い方の想像すらつかない器具も、いっぱいあった。

そして床には、奇妙な形の椅子やベッドみたいなものが並んでいた。

「これをどうするか、知っている？」

三角形の木材を四本の脚で支えた、首のない木馬を撫でながら、冴子が質問した。

「……女の人を跨らせるんでしょ。知ってます」

「五十点の回答ね。『女の人』じゃなくて、おまえを跨らせるのよ」

あからさまに言われて、桃子はあとじさった。

「そんなにおびえなくていいのよ。ほら、ここをさわってごらん」

冴子は桃子の腕をつかんで、三角木馬の頂点にみちびいた。

「ちょっとだけ丸みをつけてあるでしょ。おとなしく乗っていれば、怪我をしないようになっているの」

ほかの拷問器具も、犠牲者を殺したり不具にしたりしない配慮を払ってあるのだと、冴子は説明した。

「だから、安心して虐めていただきなさい」

おとなしく乗っていれば怪我をしないということは、痛くてもがいたりすると怪我をすることだろう。安心できるはずもなかった。だいいち、木馬の横にはどす黒い染みがこびりついている。

「おや、もうこんな時間」

冴子が時計を見て言った。

「キッチンへ行って、綾香の手伝いをしなさい」

素肌にドレスエプロン姿の綾香は、屈託のない様子で台所仕事をしていた。綾香の指図

で、桃子は床をていねいに拭かされた。

「舐められるくらいに磨いてよ。ほんとに舐めなきゃならないときだってあるんだから」

食事は黒部親子と冴子の三人ですとのだと、綾香が教えてくれた。綾香は残飯を食べさせられていた。

「残飯なら、まだいいわよ。犬に餌をやるみたいに、床に投げることだってあるんだから。そしたら、こっちも犬みたいな食べ方をしなきゃならない」

だから食事の前には自発的に床を磨くのだと、綾香が教えてくれた。

つまり、この格好で食べさせられるんだ。四つん這いになって床を拭いていた桃子は思った。

「ところで、あんたは、どんな理由で連れて来られたの？」

声を低めて、綾香がたずねた。

「あたしはね。親父が借金したまま蒸発しちゃったんだ。母さんは苦労が頭のほうに来ちゃってね。入院費がメチャかかるし」

クロベ・ファイナンスではなく、ほかのサラ金からの借金だった。高利がかさんでどう

しようもなくなかったとき、卒業したら住みこみのお手伝いさんになることを条件に、無利息で黒部が返済資金と卒業までの生活費を貸してくれたのだという。

「手取りが五十万円だもの、ただのお手伝いさんじゃないことくらい、わかってた」

二年間、我慢してきた。あと一年で返済が終わると綾香は言った。

「でも、母さんの面倒を見なくちゃならないから、風俗で働くしかないかな。SMクラブで売れっ子マゾ奴隷になったりしてね」

きゃはっと笑う声がしめっていた。

「うらやましいな」

桃子がつぶやいた。

「わたしなんか、一生ずっとだもの」

桃子も簡単に事情を語った。語っているうちに、黒部親子にではなく父親への恨みがつのっていった。

「殺されるくらいならSEXのオモチャにされたっていいと思ったけど……そんな一生なんて、惨めすぎる」

「だいじょうぶだって」

綾香は桃子の不安を笑い飛ばした。

「あんた、●成年だろ。婚約者ってことにでもしなくちゃ、いくらなんでもまずいと思ったんじゃないかな。三年か五年かわからないけど、そのうち飽きて離婚してくれるよ。げんに、あたしの先輩は二年だけだったよ」

「うん、ありがとう」

言われてみると、そうかもしれないと桃子は思った。いや、きっとそうだ。冴子さんだって、黒豚顔と結婚したのは三年前だっていうし。

あの夜いらい絶望に閉ざされていた闇の中に、希望の光が差しこんだ。何年間も性的な虐待を受けた後の自由という、線香花火とさえも比較にならないみじめな希望でしかなかったが、桃子には大輪の花火のように思えた。

犬食いをさせられると思っていた桃子だったが、その夜はただ残飯を食べさせられたただけだった。残飯といっても、そんなにひどいものではない。たっぷり用意された料理の中には、三人がほとんど箸をつけなかった皿もすこしはある。それを立ったままであわただしく詰めこめば、空腹をまぎらわす程度の食

事にはなった。

食事の後片付けがすむと、普通の家では一家団欒の時間になる。しかし黒部家では、弄虐の幕が開くのだった。

五人がいっしょに入浴すると知って桃子は驚いたが、拒んでも無駄なことくらいは、学習していた。自分でも見たことのない奥の奥まで覗きこまれてしまったのだから、もう恥ずかしいことなんか何もない。桃子は、そう思うことにした。

桃子は見学だと言われて、冷たいタイルの上に正座させられた。ほかのふたりは、仁王立ちになった男たちの正面にひざまずいた。そして、男の股間に舌を這わせた。

「わ……」

桃子は思わず驚きの声をあげた。

「わ、じゃない」

健志が苦笑する。

「まじめに見学して、先輩のテクニックを覚えろ」

綾香の行為がはっきり見えるように、健志は身体の向きを変えた。

綾香は天を衝いて聳え立つ肉棒に舌を這わ

せて、汚れを舐め取っている。それがすむと、全体を口に咥えた。頬をすぼめながら、ゆっくり頭を上下に動かす。

桃子もフェラチオくらいは知っているし、モザイク無しの画像だって見ている。だが、その行為にピチャピチャチュプチュプという音や女性の鼻息が伴うという現実には、知らなかった。

肉棒を清め終わると、綾香は健志の脚の間へいざり寄った。くるりと向きを変えると、顔をあお向けて舌を突き出す。

「ええーっ！」

桃子は、ほとんど叫んでいた。綾香は男の肛門を舐めていたのだ。

血の気が引いた桃子の顔を眺めて、健志の片頬に薄い笑みが浮かんだ。

「婚約者のケツを舐められないなんて、まさか言わないだろうな」

桃子はがたがた震えるだけで返事ができなかった。

男ふたりが大きな浴槽にゆったり浸かっているあいだに、冴子たちはシャワーで身体を洗った。いっしょに浸かるときもたまにある

と、あとで綾香が教えてくれた。

「たいてい、潜望鏡とかシンクロごっことかで虐められるんだけどね」

湯からあがると、黒部親子は距離をあけて洗い椅子に座った。綾香は乳房のあいだでボディソープを泡立てて、健志の腕をとった。Bカップじゃ、あんなことはできっこないと桃子が思っていると、冴子のやり方を見ておけと健志に言われた。

そちらに目を向けると、冴子は立ち上がって黒部の腕を股間に挟んでいた。腰を前後に動かす冴子の様子をぽかんと見ていて、不意に意味がわかった。恥毛をブラシがわりにして洗っているのだった。

「貧弱だが、おまえもタワシを生やしているんだ。役立ててもらおうぞ」

両腕を洗い終わると、冴子は黒部の背後にまわった。腰と膝を使って、背中全体に恥毛の泡を塗りたくっていく。

冴子の身体はスリムだが、乳房はけっして小さくない。それなのに、なぜ違う洗い方をさせられるんだらう。疑問を持った桃子だったが、すぐに自分で答えを見つけた。綾香の

股間には翳りがなかった。桃子は、ホテルで見せられた写真を思い出していた。

「綾香は元からパイパンだったわけじゃないぞ」

綾香の股間を凝視する桃子に気づいて、健志が言った。

「女中が一家の主婦と同じ姿をしているのは生意気というものだ。知り合いの形成外科で永久脱毛させてやった」

「マゾ奴隷の身分証明書みたいなものだ」

おまえもそうだと言わんばかりの黒部の言葉には、さすがに我慢できなかった。

「わたしは奴隷なんかじゃないです」

「これは失礼した」

黒部がおどけた口調で言う。

「二千万で自分を買って取ってくれと土下座したお嬢さんだったな」

「あれは……」

「いい加減にしろ」

言いつのろうとする桃子を、健志が厳しい声でたしなめた。

「男には絶対服従だと教えたはずだ。女の男への返事は『はい』だけだ。婚約者だろうが

親父の女房だろうが、俺たちから見れば同じことだ」

桃子は激しい怒りを感じた。だが、その怒りの正体をうまく説明できない。どんな恥ずかしいことを要求されても拒めない。縛られたり鞭でぶたれても我慢しなくちゃいけない。絶対服従ということ、桃子はそういうふうに理解していた。拒まない、我慢するというのは、桃子の自由意志によるものだ。だが、健志の言葉は桃子の自由意志を否定しているのではないか。そういったことを、桃子は直感したのだ。

「返事は、どうした？」

「はい、わかりました」

強制された返事を桃子は口にせざるをえなかった。それでも、内心の怒りは余計な言葉まで桃子に言わせていた。

「でも、わたしはマゾなんかじゃないです」

「それも俺が決める。おまえには立派なマゾの素質がある。じきにわからせてやる」

「……はい」

喉につかえた苦い塊を吐き出すようにして、桃子は返事をした。吐き出した後には惨めさ

だけが残った。

風呂から出ると、桃子と綾香はリビングルームに全裸で正座させられた。男たちは半裸にガウンを羽織っていた。

「では、反省会を始めよう。冴子からだ」

冴子はバスタオルで裸身を包み、斜めに桃子たちを見る位置に座っていた。

「申しわけありません。今日は若いふたりへの監督が行き届きませんでした」

「どういうことだ？」

「夕食の支度をするあいだじゅう、ふたりはお喋りをしていました。私も桃子の身の上に興味があったので、つい聞き耳を立ててしまって注意する機会をなくしました」

「身の上話だと。桃子、それはほんとうか」

黒部の怒声は芝居気たっぷりに作ったものだったが、桃子にはわからない。桃子はおびえながら答えた。

「あ、あの……いけなかったんですか？」

「いけなかったか、だと。仕事中に私語は禁止だと知らないのか。綾香、おまえはどうぜん知っているな」

「綾香のほうが、積極的にお喋りしていましたわ」

冴子が口をはさんだ。

「身の上話も綾香が始めて。桃子は、つられて話しはじめたようでした」

「綾香、ほんとうか？」

「はい。でも、仕事はちゃんとしました」

「そういう問題ではない！」

「すこしくらいの私語なら、大目に見てやらんでもない。だが、身の上話となると、見過ごすわけにはいかんぞ。おまえは、何度もパーティーに出ているな。出席者の素性を詮索するのはもっとも重い罪だと教えてある」

「でも、いっしょに暮らすんだから……」

「黙れ。おまえは重罪を犯した。認めるな？」

綾香の顔に、ふっとあきらめの色が浮かんだ。新入りの桃子へ見せつけるために、今夜は自分が厳しく責められるのだと悟った。

「はい。あたしは重罪を犯しました。どうぞ、厳しい罰を与えてください」

綾香はひれ伏して、唯一許されている台詞を口にした。

「さて、桃子」

黒部は、あくまで芝居がかって桃子を振り向く。

「は、はい」

身をすくめて、桃子は宣告を待った。だから、黒部の言葉を聞いて安堵の溜め息が出ってしまった。

「おまえは、まだ我が家の仕来たりに慣れていない。お喋りも先輩にそそのかされたようだから、特別に今夜は許してやる」

桃子の反応をうかがうように、黒部が言葉を切った。

「はい、ありがとうございます」

卑屈な言葉が自然に桃子の口から出た。

「黒部家の躰けの仕方を、よく見学しておけ」

黒部がポニーテールをひつつかんで、綾香を立たせた。桃子は健志に腕をとられた。

バスルームとは反対側の突き当たりにある折檻部屋で、綾香は天井から吊るされた。両端に金属の枷がついた木の棒で脚を左右に開かれた姿は、『人』の字そのままだ。

折檻部屋は室温が低めに設定されているので、家の中とはいえ肌寒い。寒さと恐怖で、

桃子は総毛立って震えていた。

「若い娘が折檻されるのを見るのは、もちろん初めてだね」

健志が、おどろおどろしい道具立ての部屋には場違いなやさしい声を桃子にかけて。

「途中で逃げ出したりせず、最後まできちんと見届けられるようにしてあげよう」

言うなり、桃子の右腕を背中にねじ上げた。

「やっ……痛い」

「左手も後ろへまわせ」

うってかわって荒々しい声が耳元に浴びせられた。うぶな桃子にも健志の意図は間違えようはなかった。

「縛らないでください。逃げたりしません」

「そこへひざまづいて、両手を後ろへまわせ。それとも、綾香と同じ罰を味わってみるか？」

素直に従うしかなかった。手首を肩の高さまでねじ上げられて、縄で縛り合わされた。生まれて初めて縛られる恐怖に、桃子は全身の筋肉をこわばらせている。

長い縄は、そのまま前へまわされて、乳房の上に食いこんだ。背後に戻った縄尻が手首の縛り目を絞って留められた。

桃子は止めていた息をほうっと吐いた。これで終わりだと思った。

「あ、まだ縛るつもり……？」

新しい縄が足されて、乳房の下にまわされた。

「いちいち詮索するな。されるままになっていけばいいんだ」

男を知らず、まして緊縛の苦しさも知らないまったくの処女肌に縄をかけていく興奮に、健志の声がうわずっている。

「う、くうう……」

脇の下から縄を通して、上下の胸縄が絞られる。桃子は息苦しさに呻いた。その声にわずかだが妖しい官能のくぐもりがあることに、桃子は無論、健志も気づいていない。綾香を吊るし終わった黒部だけが「おや？」という表情を桃子に向けた。

折檻部屋の片隅に立っている柱に、健志は桃子を縛りつけた。

「手ぬるいぞ」

黒部が息子を叱った。

「最初が肝心だ。徹底的に絞ってやれ」

健志は怪訝そうに黒部を見やったが、喘ぐ

桃子の様子から何かを察したのか、新しい縄を手にした。

「それじゃ、もうちょっと泣かしてやるか」

新しい縄を首に掛けて、胸縄を乳房の合間でひとまとめにして絞った。上下左右から圧迫されたBカップの乳房は、小さなゴム鞠のように縊り出された。

「く、苦しい……」

桃子の訴えを無視して、縄が加えられていく。二本の縄尻は下に垂らされ、へそのあたりで結び目が作られた。

「こんなものかな？」

結び目から二十センチほどはなして、また結び目が作られる。今度のは、輪の中に何度も縄をくぐらせた大きな瘤だった。その先にも、小さな結び目が作られた。

右手で花卉を左右に押し広げながら縄を桃子の股間に通して、背後に引き上げた。

「ひゃあっ！」

秘裂に食いこむ異様な感触に桃子は悲鳴をあげた。

ぎちぎちに縛られた手首と背中にあいだに縄尻が差しこまれ、首に掛けた縄で折り返さ

れた。

「どうだ、気持ちいいだろう？」

股間に食いこむ大きな結び瘤は、ただ桃子に苦痛を与えるだけだった。だが。

ばしっ！

健志のビンタは、ほかの答えを許さなかった。

「はい……気持ちいいです」

「それじゃ、もっと気持ち良くしてやろう」

あまった縄尻が、胸からへそへおりる二本の縄に絡みつき……左右に引き絞られた。

「痛い、痛い……もう駄目！ 許して！」

結び瘤に秘裂をえぐられて、桃子は叫んだ。

桃子の叫びは、サディストをさらに煽る役にしか立たない。左右に分かれた縄は尾骶骨の上で結ばれ、ふたたび股間に通された。今度は、結び瘤で割り割かれた花卉と太腿のあいだを一本ずつで前へ走った。

「あ、あ……ふう」

股間を突き上げ引きちぎるような痛みから逃れようとして、桃子は口を大きく開けて喘いだ。

「ずいぶん感じているようだな」

若い犠牲者を躡るだけのつもりで健志はうそぶいたのだが、老練なサディストはそこにかすかな事実がひそんでいることを見抜いた。「まだ手ぬるいぞ。貸してみろ」

黒部は胸縄に細紐を巻きつけた。縄で絞り出された乳房を縦に割って細紐をおろし、乳首を挟んだ。

「あ、ああっ！」

ふだんなら苦痛しか感じなかつただろうが、股間を蹂躪する縄の苦痛に比べれば格段にやさしい刺激だった。細紐に縊られた乳首が痛いほどに勃起するのが、自分でもわかった。快感など、もとよりなかった。だが、充血した乳首の疼きが乳房全体に広がっていくような感覚は、股間の苦痛をわずかでもやわらげてくれる錯覚を桃子に与えるのだった。

——圧倒的な苦痛と、わずかな悦虐の萌芽に悶えつづける桃子を仕置き柱に捨て置いて、綾香への懲罰が始まる。

「最初は軽く、百叩きからいってやろう。冴子、おまえがやれ」

皮革のボンテージコスチュームに着替えてきた冴子が、綾香の背後に立った。彼女が手

にしている平べったい革紐を束ねたものが鞭だと、桃子にも察しがついた。

「いくよ。ちゃんと数えなさい」

バラ鞭が綾香の尻に叩きつけられた。

バシッ！

「ひとつ」

百回の鞭打ちを、受刑者がみずから数えさせられるのだった。

革紐の束が、つづげざまに尻を打った。

「ふたつ、みつつ、よつつ、いつつ……ううっ、むつつ」

鞭が下から上へ跳ね上がって、尻の谷間に食いこんだ。綾香は、呻きながら数えつづける。

「ななつ、やつつ……」

冴子が受刑者の正面にまわった。

「じゅういち、じゅうに……」

乾いた音に合わせて乳房が左右にひしゃげ、綾香の声があとを追った。鞭は斜めに腹を打ち、下から上に、真正面から股間をえぐる。苦悶をまじえながら、綾香は数えつづけた。

「ふふ。今日は泣きをいれないわね。後輩の手前、頑張ってるのかしら」

冴子は鞭打ちの手を休めて、左手で綾香の乳首をつねった。右手の鞭は逆手に持ちなおして、柄を綾香の股間にねじこむ。

「いま……二十三ですね」

綾香が鞭打ちの回数を確認した。忘れてたり間違えたりすると、最初から数えなおさせられるのだと、桃子はあとで教えられた。

「おまえも悪ずれしてきたね」

鞭打ち刑が再開された。

桃子は、みずからの裸身に食いこむ縄のおぞましい感触も忘れて、惨劇の一部始終を見守っていた。そうするしかなかった。目を閉じて、肉を打つ陰惨な音が耳に響き、その回数を数えながらときおり漏らす綾香の悲鳴が、はっと目を開けさせるのだった。

刑の執行が終わったとき、全身に赤い線を刻まれて、綾香はぐったりしていた。暖房のない部屋の中で、綾香の裸身からうっすらと湯気が立ちのぼっていた。しかし、肌をつたい落ちる汗は透明だった。傷の手当てが必要なほどのダメージは受けていないのだが、そんなことは桃子にはわからない。もしも自分が同じ目にあわされたら（明日は自分の番

かもしれない)、とても最後まで回数を数えてなんかいられないだろうと、おびえるばかりだった。

手首を縛られたまま、綾香が宙高く吊るされた。その下に三角木馬が据えられても、綾香は取り乱さなかった。足枷が外されて、綾香の身体がゆっくり吊り下ろされる。木馬のとがった稜線が太腿を割って股間に食いこんだ。

「うぐ、ぐ……」

さすがに呻き声はもらしたが、綾香はじっと苦痛に耐えていた。吊られている縄がゆるんで全体重が股間にかかっても、あえて身体を引き上げようとはしない。じきに腕が痺れて、かえってバランスをとりにくくなる。二年間の被虐経験で、綾香はもっとも苦痛の少ない拷問の受け方を学んでいた。冴子が舌打ちしたのも無理はなかった。

「このまま朝まで反省させてやろう」

黒部の言葉で、綾香への折檻は終幕を告げた。綾香当人にとっては、これからがほんとうの折檻の始まりなのだが。

「俺たちも引き上げるとしよう」

桃子も柱から解放された。だが、裸身に食いこむ縄はほどいてもらえなかった。背中を押されて前へよろめき、そのまましゃがみこんでしまった。

腰を落とすと尾骶骨から肛門にかけて縄が食いこむが、へその下から肛門まではわずかに食いこみがやわらいだ。

「さっさと立て」

このままでいさせてくれるなら、朝までほっとかれてもいい。そう思うほど、立ち上がるのは辛かった。だが、命令に逆らえば恐ろしい折檻が待っている。桃子は歯を食いしばって膝を伸ばし、秘裂にみずから縄を食いこませた。

「あ……」

足を前に踏み出すと、股間でぐりっと結び瘤があばれた。花卉の外を走る縄が、太腿との間で擦れた。

「くう……」

一步ごとに呻きながら、それでも桃子は足を運んだ。

苦行の果てにたどり着いたのは、二階へ通じる階段だった。すり足で歩くのさえ、気が

遠くなるほどの苦痛だった。脚を上げればどうなるか……。

ためらっていると、平手で尻を叩かれた。やむなく、階段に足をかける。

「ぐ、ぐうう……」

刺激が脳天まで奔った。

「いやあ……」

泣きべそをかきながら、桃子は二段目を踏んだ。さらに刺激が加わる。

「ああっ……ん！」

苦痛が麻痺しかけて、その奥から奇妙な感覚が沸き起こった。快感であるはずはなかった。実も蓋もない言い方をすれば、耐え難い苦痛からのがれるために、脳内のホルモンバランスが変化しただけだったろう。

未知の感覚から逃れたい一心で、桃子は階段を夢中で登りつめた。

健志のベッドルームへ連れこまれて、自分の運命が切迫していることを桃子はあらためて感じた。

「ふたりの初夜だね。たっぷり可愛がってあげるよ」

「だって……わたしたち、まだ結婚したわけ

じゃないです」

無駄と知りながら桃子は反駁したが、健志の返事は、縄で縊られた乳房への平手打ちだった。

「結婚でいちばん大切なのは、身体の合性だ。事前にたしかめておくのが当然だろ？」

合性が悪ければ返品だと、健志がうそぶく。二千万円はまだ支払ってないぞと、脅しまでかけた。桃子は、ここでも譲歩するしかなかった。

ベッドのかたわらに立ち尽くす桃子の肩を押して、健志は向きを変えさせた。

「顔をあげてごらん」

言われたとおりにして、あわてて桃子は顔をそむけた。正面の壁は一面の鏡になっていた。裸身を幾重にも縊りあげられた自分の姿が、そこに写っていた。

「ちゃんと見ろ」

両方の乳房を握りつぶされて、桃子は再びおぞましい姿を直視せざるをえなかった。

「今ならDカップはあるんじゃないか。ウエストもくびれがくっきりだ」

中央に寄せられて突出した双球は、細紐で

縦に割られて無残に変形していた。羞恥でピンク色に染まった裸身のなかで、そこだけが鬱血で薄紫色に変色していた。

細紐がほどかれると血が通いはじめて、乳房が疼いた。縦縄がはずされると、同じように股間も熱く疼いた。それは性的な刺激と変わりにはなかった。いや、自分の指で与える刺激とは比べものにならない激しさだった。自然と口が半開きになった。

「は、ふ……んん」

「すごい感じ方だな。ん？」

桃子をからかった健志だが、手にした縄を見て真剣な顔になった。

「ぐしょぐしょになっている。おまえ、天性のマゾだな」

不本意な刺激を受ければ受けるほど乾いていく女体もある。男の侵入をなんとしてでも拒絶しようとする反応だ。さけられない強姦からみずからを護ろうとして、熱く潤ってしまう女体もある。後者だからといって、マゾだと断定はできない。前者の身体を持ちながら被虐願望を心に秘めている女性もいる。だが、桃子のような身体を持つ女は、苦痛と性

的な刺激を混同する傾向が強いのは事実だった。

「これだけ濡れていれば、手間はかからんな」

後ろ手に緊縛された桃子をそのままにして、健志は服を脱いだ。素っ裸になって、ベッドにごろんとあお向けになった。すでに逸物は反りかえって、腹に密着しそうなほどだった。

「さあ、おいで」

意味がわからずきょとんとしている桃子。健志は自分の手で怒張を垂直に立てた。

「下の口から涎を垂らすほど、これが欲しいんだろ。だったら、自分で挿れてみろ」

そんな破廉恥なことが、処女の身でできるはずがなかった。だが、鞭はいやだった。三角木馬は、もっといやだった。桃子は立ちつくしたまま大粒の涙を両目からあふれさせた。

「さっさとベッドに上がれ」

どうしていいかわからなくなった桃子は自分の意思を捨てて、ぎくしゃくと健志の言葉に従った。

「俺を跨いで膝をつけ」

涙で視界がぼやけた。健志の手が桃子の尻をつかんで結合の位置へ導く。凄まじく熱い

塊が秘唇にあてがわれるのを、桃子は感じた。

つぶっと、灼熱の棒がかすかに秘裂を割った。

「いいぞ。そのまま思い切って腰を落とせ」

桃子は命令に従おうとした。膝の力を抜いて腰を沈めかけた。同時に、股間をまっふたつに引き裂かれるような激痛を感じて腰を浮かした。

「痛いのか？」

それにはこたえず、桃子は自分を引き裂く試みに再挑戦した。健志が猫なで声を出したときは、かならずひどい目にあわされる。桃子は黒部家のマゾ牝奴隷としての心得を、急速に学習し始めていた。

「う……く」

一気に腰を落としてしまおう。痛いのは最初だけだ。少女コミックの知識にすがって、桃子は自分をはげました。だが、桃子の身体は意思に反してびくとも動かなかった。いや、意思に反してだろうか。

苦痛からは逃げられない。拒否すれば厳しく罰せられて、それから犯されるだけだ。でも……天性のマゾだなんて言われて、こんな

奴のペニスを欲しがっているなんて言われて。このまま命令に従えば、すべて認めたことになる。そんな思いがないといえば嘘になる。

中腰の不安定な姿勢をいつまでもたもっていられなかった。桃子はベッドから転げ落ちた。肩をしたたかに打ったが、痛みを感じている暇はない。後ろ手に緊縛されたまま、床にひれ伏した。

「ごめんなさい。できません。ふつうにSEXしてください。絶対に抵抗しませんから」

犯してくれと懇願している自分に、桃子は気づいていなかった。

「そうか。どうしてもいやか」

健志の声は、あくまでやさしかった。

「それじゃ仕方ないな」

健志もベッドからおりて、ガウンをまとった。

「折檻部屋で、おまえの気が変わるのを待つとしよう」

その運命を、桃子はじゅうぶんに予測していた。それでも、泣き叫ばないではいられなかった。

「いやあっ！ 許して。もう気が変わりました

た。ちゃんとします。だから、あの部屋だけは許してください」

髪の毛をつかんで引き起こされた桃子の腹へ叩きこまれた拳骨が、健志の返事だった。

桃子は泣きじゃくりながら折檻部屋へ連れ戻された。

「やっぱり……」

三角木馬の上で呻吟していた綾香が、縛られたままの桃子を見てぼそとつぶやいた。同情というほどの感情はこもっていない。筋金入りのサディストが、新しい生贄に翌晩まで手を出さないわけがないと、納得しただけだった。

桃子はすべての縄をとかれた。床にへたりこんで、しかし、もう騒がなかった。哀願は無駄だと悟っていた。それに――おとなしく懲罰を受けている綾香の前で、自分だけが騒ぐのは、卑怯なように思えた。なにかと理屈をつけて自分を追いこんでしまう心の動きは、桃子の受動的な性格の端的なあらわれだった。

あらためて桃子の手首が前で縛り合わされた。天井の滑車を通った鎖につながれて手首

が頭上に引かれると、いやでも桃子は立ち上がらねばならなかった。さらに鎖が引かれて、桃子は爪先立ちになった。開脚枷は着けられなかった。

桃子が吊られているあいだに、黒部と冴子も姿を見せていた。黒部は部屋の隅に置かれたベッドに据わり、四つん這いになって尻を向けた冴子の背中に脚を投げ出している。爪先で気まぐれに冴子を蹴りながら、息子の手際を眺めていた。

「綾香と同じでは芸がないな」

健志は黒く細長い笞を手にとった。玄関で叩かれた笞に似ていた。革紐を束ねた凶器よりは痛くなさそうだと、わずかに桃子は安堵した。わずかな面積に打撃が集中するぶん、ダメージが大きくなるとは、桃子は知らない。

処女肌への記念すべき一撃目は、乳房に加えられた。

びしっ！

「いぎゃあっ！」

肉を打つ鋭い音を追って、しゃがれた悲鳴が部屋に響きわたった。

乳房を真一文字に切り裂かれたと、桃子は

信じた。

「や、やめ……やだ、許して」

桃子は必死に訴えた。

「なんでもします。自分でチンポの上にしゃがみます。お風呂でお尻を舐めます。だから、もう許してくださいいい……」

●四歳の処女が口にすべきではない言葉が、つぎつぎと桃子の口から迸った。最後は泣いていた。

「ふん、根性のないやつだ」

薄笑いを浮かべて、健志は桃子に近寄った。

「手加減しないで思い切りぶちのめしてやったから、まあ、無理もないか」

双つの乳房を水平に走る赤い刻印を親指でなぞる。

「つ……」

できたばかりの傷をえぐられて、桃子は呻いた。健志の親指が、桃子の唇になすり付けられた。血の味がした。

閉じた股間を割って、笞の柄がこじ入れられた。桃子は爪先立ちのまま笞を跨ぐ格好になった。

「何でもするという言葉に嘘はないな」

健志は笞を両手で引き上げて股間を前後にしごく。

「はい……何でもします。だから、もう許してください」

しゃくりあげながら、桃子は誓った。

健志が満足そうにうなずいた。

「いいだろう。それじゃ、命令するぞ。命令に従うな」

「はい」

許された安堵で脚の力が抜けて両腕に全体重がかかったが、苦にならなかった。

「では命令だ。この笞に、あと五十発耐えるんだ」

言葉の意味を理解するのに、ひと呼吸の間があった。理解すると同時に、桃子はあらん限りの声で泣き叫んでいた。

「……嘘つき！ やだ、やだ、許して。いやだああっ……！」

哀願を心地よく聞き流して、健志は笞を振りかぶった。

「その様子じゃ、数えられそうにないな。最初だからサービスしてやろう。ひとつ」

ぴしっ！

最初の傷と平行に笞が乳房をえぐった。

「ぎゃああっ！」

少女の声とは思えない咆哮が桃子の喉から迸る。

「ふた一つ」

肉を打つ乾いた音と少女の絶叫。笞打たれるたびに桃子はのけぞり、つま先が床を蹴った。

健志が五つを数え、桃子の乳房には六筋の赤い線条が刻まれた。最初的一本を除くと刻印は不鮮明で、肌は破れていない。力を加減して、打ち方も変えた結果だった。

健志はツインテールをつかんで桃子の顔を起こした。自分は脇へよけて、涙でぐしゃぐしゃに濡れた顔を正面に向けた。

この部屋にはビデオカメラが幾つも仕掛けてある。そのひとつに、桃子の顔を向けさせたのだった。黒部が手に持ったリモコンのモニター画面に、桃子の悲惨な顔がズームで映っている。

「鞭打ち甲斐のある尻だと、親父は言っていたな」

健志が、つうっと笞の先端で尻の谷間を撫

であげる。

ようやく爪先立ちの姿勢に戻った桃子は、息を止めて打擲を待った。叫ぶ気力も、もう失われていた。

びしいっ！

「あぐっ……」

お尻なら我慢できる。呻きながら桃子は思った。

十発ほどたてつづけに水平に打たれた後は、片方ずつ縦に打たれた。桃子の臀部に鮮やかな碁盤の目が浮き上がったが、もちろん本人には見えない。

下腹部にも碁盤の目を刻まれ、太腿は前後左右から水平に打たれた。

桃子は息も絶え絶えに、ただ苛酷な時間が通り過ぎるのを待った。しかし、時間は止まっていたのだ。打擲の回数は五十回を超えて、六十回ちかかった。

生贄が痛みに馴れたと見て取った健志は、不意に左の乳房を縦に打った。

「ぐぎゃあっ！」

白い喉を突き出して吠える桃子。乳首を挟んで二本目の縦筋が刻まれ、三本目は乳首の

上に刻まれた。

がくっと首を垂れる桃子。健志はかまわず、右の乳房にも三本の刻印を施した。

そうして、ようやく笞を手放した。上半身裸になって汗を拭う。若い牡の体臭が湯気とともにたちのぼった。

鎖が緩められて、桃子は床に投げ出された。手首の縄もほどかれたが、まだ失神したままだった。

冴子が立ち上がって、黒部の手からウイスキーグラスを受け取った。桃子の顔をあおむかせ、ほとんど生にちかい洋酒を口移しで注ぎこんだ。

内側から喉を焼かれて、桃子が意識を取り戻した。

「げほっ……うげええ」

むせながらウイスキーを吐き出したが、半分くらいは飲みこんでしまった。

「目が覚めたところで、初夜の続きだ」

健志が桃子を引き起こし、後ろで両手を向かい合わせた形で手首を縛った。後ろ手に縛られた処女に騎乗位を強制するアイデアにこだわっている。

「家族全員に祝福されながらオンナになれるなんて、おまえは幸せすぎるぞ」

健志は桃子を折檻部屋のベッドに追い上げた。黒部は、あいかわらずベッドの縁に腰掛けていた。冴子も身を起こして、黒部のそばにはべっている。裸になった健志の股間は、父親の前でも隆々と聳え立っていた。ベッドに仰臥して、怒張を真上に向けた。

そこまでされて、やっと桃子は健志の言葉の意味を理解した。愛してもいない男のペニスを自分で挿入させられるだけでも屈辱的なのに、その父親や父親の愛人にまで見物されるなんて、惨めすぎた。

しかし桃子は、おずおずと健志を跨ごうとした。笞打ちへの恐怖とアルコールの作用が、桃子の理性を麻痺させていた。いや、理性が働いていたとしても、同じ事を桃子はしていただろう。ほかに選択の余地がないのだから。

「ちょっと待て」

意外にも健志が制止した。

「ちっとも濡れていないぞ。そんな道具に捻じこまれたら、チンポが痛いじゃないか」

勝手な言い草だった。ペニスを啜えて唾を

濡れと言う。

「風呂場を見て、やりかたはわかっているな」

もはや桃子にとっては、明日させられるか今すぐかの違いでしかなかった。健志の横に座りなおして、怒張を口に含んだ。

(ファーストキスも、まだなのに)

異性の唇さえ知らない自分が、いきなりペニスを口に含まされた事実は、悲劇を乗り越えて喜劇的にさえ感じられた。

生臭いにおいが、口にひろがった。べたついた塩辛い味が、舌を刺激した。

「わしは、こっちを手伝ってやろう」

尻を浮かせた桃子の背後から、黒部が股間に指を這わせてきた。

「ん、むっ……」

桃子は驚いて顔を上げようとしたが、髪をつかんで引き戻された。

「舌を使え。歯をたてるんじゃないぞ」

桃子はリズムカルな動きで頭を上下に揺さぶられた。鼻を健志の股間に押しつけられるたびに、怒張が喉の奥を突いて吐き出しそうになる。その動きに合わせてるように、黒部の指が花卉の上を往復し、クリトリスを転がし

た。アヌスにも違和感があったが、たしかめている余裕を桃子は失っていた。じきに、桃子の上下の口が、ぬちゃぬちゃぺちゃぺちゃと淫猥な音を発しはじめた。

あらためて、桃子は健志を跨いで膝をついた。腰をゆっくり沈めると、花卉が左右にくつろげられて、粘膜に熱い塊が押しつけられた。

「んっ……！」

桃子はすたとんと腰を落とした。びしっと何か裂けた音を聞いたような気がした。灼熱間をともなった激痛が、股間から背筋をつたわって脳天に突き抜けた。しかし、乳首を笞打たれる激痛に比べれば、はるかに耐えやすかった。とうとうオンナになった（された）という、感慨が桃子の心を掠めた。

「いつまでそうやっているつもりだ。腰を振れ」

ぐんと下から突き上げられた。

「あっ」

振り落とされそうになって上体を前に倒すと、今度は腰をつかんで押し下げられた。二度三度と繰り返すうちに、膝と腰で相手の動

きに合わせるコツをつかんだ。

「呑みこみがいいぞ。その調子だ」

「うっ、うっ、あうっ……」

腰を上下させるたびに痛みを感じたが、たいしたことなかった。桃子は自発的に腰を振っていた。律動を止めれば叱られると、本能が悟っていた。

やがて。流れ出した破瓜の血に分泌液が混じり合って、結合部からピンク色の泡が飛び散り始めた。

——いつ果てるともない膝の屈伸運動がつづく中で、体内を貫く怒張がさらに太さを増した瞬間、痙攣するのを桃子は感じた。

健志が桃子を突き飛ばすようにして身体を起こした。初夜の交わりは終わった。だが、桃子の務めはまだ終わっていなかった。

「そら」

健志が膝立ちで、桃子の鼻先に股間を突きつけた。命令される前に、桃子は血まみれの肉棒に舌を這わせた。まだじゅうぶんに硬く熱いペニスを上下に舐めてピンク色の泡を掬い取り、雁首に沿って舌先を動かした。どろっとした血なまぐさい味が、口の中に溜まっ

ていく。そのままではペニスを啜えられない。

「吐き出すんじゃないぞ」

目をつむって呑みこもうとしたが、喉が痙攣して吐き出してしまった。

「行儀の悪いやつだ」

あとでお仕置きだと宣告された。

ペニスを啜えると、尿道に残っている汁まで吸い出すように命じられた。頬をすぼめて唇で付根から先端に向かってしごいた。

「未熟なわたしをオンナにさせていただいて、ありがとうございます。これからも誠心誠意、健志様やお義父様にお仕えさせていただきます」

屈辱の台詞を強制されて、ようやく桃子の初夜は終わった。

そして、粗相をしたお仕置きが始まった。

折檻部屋の片隅は一段低いコンクリート床になっている。そこで身体を洗われた。水の冷たさよりも傷口に沁みる痛みに桃子は悲鳴をあげたが、冴子は容赦なくシャワーを浴びせた。桃子の身体を拭いたバスタオルは、ところどころが薄く紅色に染まった。

リノリウムの床の上に戻されると、桃子は

正座させられた。勝手に膝をくずさないようにと、太腿を左右別々に縛られた。背中で縛られた手首が、ま後ろに吊り上げられた。腕が水平まで上がったところで、肩に痛みを感じた。さらに吊り上げられる。

「痛い……」

手首がぎりぎり上がり、それに比例して上体が前かがみになった。バランスがくずれて前へのめりかけると、腕が上へ引かれて肩に激痛が走った。ただ吊られているのとは違って、腕に体重をあずけられない。上体を前倒しにして背後の腕を斜めに上げた不自然な姿勢を自分の筋力でたもつしかなかった。

「おっと、傷の手当てを忘れていたな。冴子」

命じられて、冴子が壁の収納棚から薬壘を取り出した。

「化膿したら大変なのよ」

自分は薄いゴム手袋を嵌めて、脱脂綿に薬壘の中身をぶちまけた。脱脂綿が茶色に染まり、エタノールの臭いが桃子の鼻をついた。若い世代は、ヨードチンキの殺菌効果も刺激性も知らない。すくなくとも刺激性については、桃子は身をもって知ることになった。

脱脂綿が乳房の筈痕をなぞった。

「いやあっ……」

冷水シャワーとは桁違いの沁み方に桃子は悲鳴をこらえられなかった。逃れようともがくと、肩が軋んだ。

「じっとしてなさい」

冴子の口調には、愉悦の響きがあった。ヨードチンキ液を注ぎ足しながら、すべての筈痕を丹念になぞった。桃子の肩から膝までが茶色に染まった。

左右に身体をひねってもがいているうちに、桃子は両膝を大きく開いていた。

「そうだ、ここも出血していたわね」

脱脂綿を持つ冴子の手が股間に伸びた。あわてて膝を閉じ合わせようとした桃子だったが、間に合わなかった。

「う、うああ……」

貫通したばかりのトンネルの中に脱脂綿をえぐり挿れられて、桃子はわめいた。炎を押しつけられたかと思うほどの痛みだった。しかも、炎はしだいに燃え盛っていく。

「許して……許してください」

桃子はぼろぼろと涙をこぼして訴えた。

「よしよし、もうすぐ終わるわよ」

子供をなだめるような口調で、しかし冴子の右手は脱脂綿をさらに押しこんでいる。

「さ、終わったわ」

仕上げとばかりにクリトリスを抓って桃子から甲高い悲鳴を絞りだす冴子の手に、脱脂綿はなかった。

「今夜はゆっくりお休み。明日からは厳しい花嫁修業が待っているよ」

黒部父子と冴子は、ふたりの生贄に背を向けた。

「待って。置いていかないで。この薬を拭きとってください」

哀訴を繰り返す桃子の眼前で牢獄の扉がぱたんと閉じられた。あとには白い裸身と茶色の裸身、そして桃子のすすり泣きだけが残された。

●四年と九か月の生涯でちらっとでも想像したこともないほどの肉体的なダメージを受けた桃子だったが、精神的なショックはさらに大きかった。しかも大人でもほろ酔いくらいにはなる量のアルコールを摂取させられていてはたまらない。全身を焙りつづけられる

ような痛みに悶えながら、桃子の意識はしだいに薄れていった。

4. 冬休みは隷従特訓

頬をはたかれて、桃子は目を覚ました。目の前に冴子が立っていた。

「いい加減で起きなさい。もう十時よ」

一瞬、桃子は自分がどこにいるのかわからなかった。が、両肩の激痛が昨夜の出来事を思い出させた。頭が膨らんだり縮んだりしているような奇妙な感覚もあった。吐き気も感じていた。

あれは夢なんかじゃなかった。ほんとうにあった事なんだ。桃子は自分の置かれた境遇にあらためて戦慄した。

(でも、お父さんに殺されるよりは、まだ)

せめてそう考えなければ、気が狂いそうだった。

そんな桃子の内心の葛藤には関係なく、冴子はてきぱきと動いた。桃子を拘束から解放してコンクリートの洗い場へ連れて行き、膾から脱脂綿をほじくり出した。純粹のエタノールでヨードチンキを拭き取って、ひとしきり桃子を泣かせる。

最後にぬるめのシャワーを浴びせられて、

桃子はようやく人心地がついた。乳房に目を落とすと、まだくっきりと縦横に線条が走っていた。ぎしぎしと痛む肩をかばいながら、桃子はそっと身体を拭いた。バスタオルの柔らかな生地が、自分で自分を拷問している錯覚におちいるほど、笞痕には痛かった。それでも、バスタオルは純白のままだった。

収納棚から新たな薬が取り出された。パウダースプレータイプの傷薬らしかった。今度は、まったく痛くなかった。

碁盤目の笞痕を刻み付けられた裸身に小さな前掛けエプロンを飾っただけの姿で、桃子は玄関脇の事務室へ行かされた。黒部親子は市内のオフィスへ出勤した後で、昨日とは違う社員がひとりで退屈そうにスポーツ誌を読んでいる。もちろん、社員の退屈は桃子をひと目見たとたんに解決される。

ご挨拶なさいとうながされても、台詞を教えられていない。考えられる限り卑屈でへりくだった挨拶をするしかなかった。

「健志様の婚約者として、花嫁修業に住みこませていただくことになった瀬田桃子です。どうか、よろしくお願い致します」

冴子はニットのセーターにミニスカート姿だった。まともな服装をした冴子の隣で、全裸も同然の姿で土下座する自分がみじめだった。

「へええ。社長もすごいが、専務も負けてねえな。そのちっちゃなエプロンも取って見せてくれないかな」

桃子は戸惑って冴子を振り返った。彼女の指示は単純明快だった。

「殿方の命令には絶対服従でしょ」

桃子は立ち上がって、エプロンの紐をほどいた。

「ふうん。ま、昨日の今日なら、そんなもんか」

からかわれるか、もっと恥ずかしい命令をされるかとおびえていた桃子には、男の反応は意外だった。黒部に釘を刺されているのかもしれない。

（自分の持ち物を勝手にさわられたら、誰だっていやだもんね）

綾香ならきっとそう言うだろうと、桃子は自虐的に考えた。

用心棒への挨拶につづいて、事務室の掃除

を言いつけられた。男を愉ませようという冴子の配慮らしかった。あるいは、桃子の調教を意図したのかもしれない。いずれにしても、桃子の羞恥心が試される点に変わりはない。昨夜のような折檻から逃れられるのなら、男の眼前で素っ裸のまま掃除をするくらい、平気だった。

だが、桃子には差し迫った問題があった。「はい。でも……その前に、トイレに行かせてください」

昨日の昼前に学校で用を足してからずっとトイレに行っていなかったと、思い出していた。昨夜の拷問で気絶したときに失禁していたかもしれないが、それでも尿意はすでに限界だった。

「トイレに行って何をしたいの？ オシッコ？ ウンチ？」

「オシッコです」

恥ずかしがっている余裕もなくなっていた。「困ったわね。トイレは、旦那様か健志様のお許しがないと使えないのよ」

意地悪く笑う冴子は、ちっとも困っているようには見えなかった。

「夕方まで我慢できないの？」

「無理です」

「そうねえ。お漏らしされても困るし」

ここでしてしまいなさいと言って、冴子が掃除用具のロッカーからバケツを取り出した。

「そんな……いやです」

羞恥心などかなぐり捨てたつもりの桃子だったが、さすがにためらった。しかし、この家で桃子の抵抗が容認されることは絶対にならない。

「どうしても我慢できないと言ったのは嘘だったの？ しかも、私の命令に逆らうつもり？」

「そんなつもり、ないです」

べそをかきながら、桃子は壁に向かってバケツの上にしゃがんだ。一秒でも早く尿意を解放したい思いもあった。

それなのに、すぐには尿が出なかった。出口の直前まで押し寄せている切実な感覚があった。今にも膀胱が破裂しそうだった。脂汗を浮かべて、桃子はいきんだ。なのに、出ない。少女の羞恥心が、本人の意識を裏切って抵抗していた。

「苦しそうね。三崎さん、手伝ってくださるかしら」

「へ？ 手伝うって？」

ぽかんと口を開けた男の耳元に、冴子が何事かをささやいた。

「いいんですか？ 雷が落ちるんじゃない？」

自分が嫁の教育をまかされているのだと、いっばしの姑のようなことを言う冴子。

「それじゃ、お言葉に甘えて」

三崎と呼ばれた男が、桃子の背後に近寄った。

肩を抱きすくめられて初めて、桃子は三崎に気づいた。

「きゃっ……なに？」

「オシッコが出ないなら、手伝ってやろう」

三崎が背後から桃子におおいかぶさって、下腹部を強く押した。

「やだっ……やめて。自分でします」

桃子は立ち上がろうとしたが、さらに尿意が強まって、あわててしゃがみなおした。それでも出ない。

「ほーら。シートトト」

三崎が桃子の腹をぐりぐりと揉んだ。羞恥

心に閉ざされていた尿道が、ついに屈服した。おびただしい水量に叩かれる金属音が室内に響いた。

金属音が滝の落ちる音に変わっても、まだ放水はとまらない。バケツの三分の一ちかくまで水量が増えて、やっと水音は止まった。

濃縮された尿の臭いがたちこめる部屋で、バケツに尻もちをついたまま放心する桃子。

「ついでにウンチもすませなさい」

桃子は弱々しく首を横に振った。

「出ません」

「あとでしたくなっても、もう許さないわよ」

「健志様が帰られるまで我慢できます」

それ以上は、冴子も無理強いしなかった。

「したくないなら、それでもいいわ。さっさとオシッコを片付けなさい」

桃子は立ち上がれなかった。跳ね返った小水で股間は濡れそぼっている。立ち上がれば、あたりを汚してしまう。

「あの……ティッシュをください」

「贅沢言うんじゃないよ」

ティッシュのかわりに、床掃除のモップを目の前に投げ出された。

「それで拭きなさい」

手伝ってやろうかと三崎がモップに手を伸ばしかける。桃子はあわててモップを引き寄せた。柄を逆さに持って、中腰で股間を拭いた。

バケツの中身は折檻部屋の洗い場に流した。シャワーで下半身も洗いなおした。

バケツに水を汲んで事務室へ戻ると、冴子の姿はなかった。男の社員とふたりきりの部屋で、桃子は掃除を始めた。小型の掃除機で床のゴミを吸い取ってから、カーペットの掃除。柄の短い掃除ローラーは、三崎のリクエストで四つん這いになって使った。エプロンの着用は許されたが、何の役にも立っていなかった。

(二十四時間前は、ふつうに授業を受けていたのに……)

三崎の目の前に裸の尻を突き出してローラーを転がしながら、わずか一日で激変した自分の境遇を、桃子はまだ受け入れられないでいた。縛られて鞭打たれて犯されて、見知らぬ男の前に全裸を晒して。何年か我慢すれば解放される望みはあるが……何年どころか、

もう一日だって我慢できない。

(裸のまま、縄や鞭の傷跡が残ったこの姿で逃げ出したら、どうなるだろう)

警察に保護されて、事情を聞かれて、黒部親子は逮捕されるに決まってる、桃子は単純に考えた。そして、身近な人間には誰のことかわかるような報道。父は自殺するだろう。桃子自身は、施設に保護してもらえば巻き添えは食わない。

(でも、母さんは……)

だいいち、外の門は鍵を掛けてあると教えられていた。あの高い塀をよじ登るなんて、とても無理だ。

(月曜に、学校へ行ったとき……)

その日が終業式。一日だけだから、たぶん休まされる。

(三学期になったら……)

学校へ行かせてもらえるだろうか。二学期からずっと不登校でも卒業した先輩もいる。でも、先生の家庭訪問とか、いろいろあるだろうし。父から事情を聞いたら、ここまで来てくれるんじゃないかな。そのとき先生に相談したら、なんとかなる……かもしれない。

(三学期まで……あと三週間！)

気が遠くなるくらい先だ。それでも、三年よりはずっとまじだった。

カーペットが終わると、灰皿とゴミ箱を片付けて、デスクを軽く拭いて、おしまい。モップもバケツも使う機会はなかった。それなのに、なぜそんな物が用意されていたのかと、桃子はそこまで気をまわさなかった。

昼前になって、綾香が買い物に出かけた。その服装がすごかった。裾の長いTシャツ一枚で、下着も着けていなかった。ウエストをベルトで巻いてミニワンピースふうに見せかけている。ベルトのせいでかえって裾が上がって、尻のえくぼが見えかけていた。乳首もくっきり浮き出ていた。そんな姿で綾香は自転車に乗って、寒風の中を買い物に行かされたのだった。

「日課だもん。どうってことないよ」

目を丸くしている桃子を励まそうとして言ったのだろうが、かえって桃子は衝撃を受けた。尻を剥き出しにしてサドルを跨いでいる自分の姿を想像してしまった。

昼食は残飯ではなかったが、夕食の豪華さ

が嘘だったみたいなレトルト食品だった。空いている椅子に座ることを許されなかったのは、昨夜と同じだった。

食事の後で、桃子は簡単な作法を冴子から教えられた。

男に対しては常に敬語を使うこと。ただし、拒否の言葉は禁句。「いやです」とか「許してください」などは、どんなに丁寧に言っても懲罰の対象になる。

相手の目を見て話すのも失礼にあたると教えられた。まっすぐ相手に向いて、目を伏せる。「チンポを見てなさい」と冴子は露骨な表現をした。

「そのほかは、とくにないわね。落ち度がなくても、殿方の気まぐれで折檻部屋行きになることだって、しょっちゅうだし」

細かく注意されたのは、男への呼びかけ方だった。冴子と綾香は、黒部を「旦那様」と呼んでいるが、桃子がそう言うのはおかしい。桃子は黒部を「お義父様」と呼ばなければならなかった。それ以外の男は、苗字に必ず「様」を付けること。

「クラスメートも例外じゃないわよ」

冴子が念を押した。桃子への調教は、家の中だけではないのだった。

午後から夕方までは家事もなく、休憩が許された。

「目を閉じて横になってるだけでもいいから、とにかく身体を休ませときなよ」

先輩のアドバイスは、悲しいくらいに切実だった。明け方まで木馬の上で呻吟していた綾香は、目の下にクマを作っていた。

与えられた個室には勉強机がぽつんと置いてあるだけで、ベッドもなかった。部屋の隅に毛布がたたんであるのを見つけて、それにくるまった。

(ほんとに……これからどうなるんだろう、わたし?)

まだ痛む肩をかばってうつ伏せになって、桃子は泣いた。母の性格はわかっているつもりだった。娘がこんな目にあっていると知ったら父を責めて——でも、心中にはつき合ってしまうだろう。父を見捨てて娘といっしょに家出するなんて、できない人だ。つまり。警察にも駆けこめないし、先生に相談だって

できないかもしれない。ということは。健志様（じゃない、じゃない！）あいつが、わたしに飽きるまで、こんな生活をずっと耐えなくちゃならないんだらうか。

思考がもつれて、底知れない恐怖の渦に引きこまれていく。

（男性には絶対服従で、クラスメートも例外じゃないんだ）

不意に野島聡の顔が浮かんだ。クラスメートで、ちょっと桃子が片思いの——だ、ん、せ、い。

（好きだ、つき合ってくれって、コクられたら）

まさかね。でも、そうしたら、「はい」って答えなくちゃならないんだらうか。SEXを要求されたら、拒めないんだらうか？

女にされたばかりの器官が潤ってくるのが自分でわかった。

（あ……！）

根本的な矛盾を桃子は発見した。自分には婚約者がいる。ほかの男性に要求されてSEXしたら、それは不倫だ。

もっと極端な場合も考えられる。健志に「他

の男とはSEXをするな」と命令されて、他の男から「SEXさせろ」と言われたら……どうすれば、いいんだろう。

とりとめのない、しかし実際に直面したら途方にくれるシチュエーションをあれこれ思いめぐらせているうちに、許された休息の時間は過ぎていった。

ちなみに、桃子の発見した矛盾には綾香が明確な回答を与えてくれた。

「決まってるじゃない。その男の命令に従って、あとで健志様に懺悔すればいいのよ。徹夜の三角木馬がソフトSMに思えるくらいのお仕置きが待ってるけどね」

夕食の献立は、調教二日目の桃子をいたぶるものだった。食器の支度やダイニングキッチンの清掃は綾香が受け持ち、調理は桃子にゆだねられた。その夜のメインディッシュは天麩羅だった。無防備の裸身で、煮えたぎった油の跳ね散る大鍋の前に立つことを強制されたのだった。

「きゃ……熱っ……」

具材を入れるたびに、桃子は小さく悲鳴を

あげた。

「いちいち、うるさいね。下作りをしっかりと
しておいて、油の温度管理もできていれば、
油が跳ねたりはしないわよ」

料理も身体で覚えるのが黒部家の家風だと、
後ろで監督している冴子がうそぶいた。天麩
羅油から煙があがるまで過熱するよう指図し
たのも冴子なのだが。

悲鳴をあげる余裕があるうちは、まだいい。
跳ねた油滴に笞の傷跡を直撃されたときは、
ものも言わずにキッチンシンクへ走り、蛇口
から迸る冷水を乳房に浴びせた。桃子がおそ
るおそる鍋の前にもどったときには、天麩羅
の衣はフライみたいに茶色く焦げていた。

今夜の反省会は自分が主役にされるだろう
と、桃子は覚悟した。

しかし反省会の前にも、桃子は幾つもの試
練をくぐらねばならなかった。最初は夕食だ
った。

「なんだ、これは。中までガリガリじゃない
か」

「こっちは、半生よ」

「どうせ、甘やかされ放題に育てられて、ま

ともに料理をしたこともないんだろう」

さんざんに罵られてから、焦げたタマネギの天麩羅がひとつだけ床に投げ捨てられた。それを健志がスリッパで踏みにじった。

「おまえの夕食は、これだけだ」

そう言われて、むしろ桃子はほっとした。山盛りの失敗作を全部食べさせられることをいちばん恐れていたのだ。

「もうしわけありません。つぎからは、ちゃんと作れるように頑張ります」

あらかじめ考えておいた詫びの言葉を述べて、桃子は四つん這いになった。床を舐めるようにして、天麩羅を食べた。落ち度がなくても折檻されるときがあると冴子は言うが、従順に振る舞っていれば、すこしは手加減してくれるかもしれない。

そうして、最初の試練は無事に切り抜けた。つぎは入浴だった。

つぎからつぎへと想像を絶する状況に翻弄された昨夜とは違って、それがどんなに恥ずかしくて辛くていやなことでも、何をされるかさせられるかは、わかっている。ツインテールのリボンをはずして髪を輪ゴムで短くま

とめる余裕が、今夜の桃子にはあった。

男たちの後からバスルームにはいり、意を決して健志の前にひざまずいた。持ち主のへそを突き上げるみたいに聳え立った物体を、桃子はあらためて観察した。勃起したペニスを冷静に観察するのは、これが初めての経験だった。

(こんな太いモノが、わたしの中に入ったなんて……信じられない)

比較する対象を知らないので実感はないが、十五センチとか四センチといった数字だけは、ティーンズ雑誌で読んだ記憶がある。健志のそれは、明らかに平均以上だ。

(缶コーヒーを縦につないだみたい)

叱られないうちにと、桃子は顔を近づけた。舌を突き出して、コーヒーの缶にしては柔らかな円筒を舐めた。味はなにも感じなかった。

最初は息を止めていたが、ずっとはつづかない。息を吐き出して、ちょっとだけ吸った。それでも、蒸れた体臭をたっぷり嗅いでしまった。吐き気を催して叱られることを怖れていたのだが、なんともなかった。体育のあとの着替えで嗅がされる同性の汗の臭いに比べ

れば、さわやかとさえ感じた。

ペニス全体を咥えてのピストン運動も、平気でやれた。もっとも、喉の奥を突かれて咳きこんだり、舌の動かし方が悪いと叱られたりで、終わったときには涙ぐんでいたのだが。

フェラチオから解放されて、つぎが正念場だった。仁王立ちになった健志に背中を向けてから後ろへさがり、脚のあいだに正座した。引き締まった尻に両手を掛けて左右に分けると、その奥に赤紫色の蕾があった。目を閉じて舌を突き出しながら腰を浮かした。

柔らかな襞を舌先に感じた。かすかな苦味はあったが、襞のひとつずつに舌を這わせているうちに馴れてしまった。息を継ぐと、フェラチオの時にはなかった腐敗臭のようなものを嗅ぎ取ったが、なぜか嫌悪はなかった。

桃子は女性のうちでも受動的な性格といえるだろう。処女を奪った相手に隷属し、そのすべてを受け容れる心理がはたらいていたのかもしれない。

「初めてにしては上出来だ」

股間を健志の爪先で軽く蹴られて、清掃奉仕を無事に終えたと桃子は知った。

気がついてみると、黒部はとっくに湯に浸かっており、冴子までが黒部と並んで桃子の奉仕ぶりを見物していた。綾香も、身体じゅうの泡をシャワーで洗い流しているところだった。

黒部が先に湯からあがると、冴子が床にエアマットを敷いた。

「いずれ、おまえにも仕込んでやるから、身体を洗いながらよく見ておけ」

健志が浴槽の中から声をかけた。

エアマットの上の黒部を洗うのは、今夜は綾香の役目だった。あらためてスポンジで身体じゅうに泡を塗りたいくと、仰臥した黒部に抱きついた。乳房を黒部の胸板で押し潰し、太腿のあいだに怒張を挟みながら、身体を前後に大きく動かし始めた。

前を洗い終わると、今度はうつ伏せになった黒部におおいかぶさって、同じように背中を洗った。

(男に身体を擦りつけるなんて……)

内心のつぶやきが途切れて、桃子は頬を赤らめた。ペニスの上に腰を沈めるほうが、よっぽど破廉恥だと思った。今の綾香だって、

やらなければ折檻されるから、厭々やっているのだ。昨夜の桃子と同じだった。

綾香の泡踊りが終わると、桃子のタワシ洗いの番だった。

桃子の恥毛は自身の髪の毛に比べても、ずいぶんと細く柔らかい。生え方も恥骨をカバーするくらいの面積しかない。それをタワシと言われるのは心外だった。ただし、長さだけはタワシと同じくらいしかない。

桃子は薄い恥毛が隠れるまで泡立てて、健志の腕をとった。腕を股間に押しつけて腰を前後に動かすと、筋肉の上で花卉がつるっと滑るのがわかった。刺激のさざ波が股間を這いのぼった。

「あ……」

吐息を漏らす桃子。刺激は嫌悪をともなわず、むしろボディシャンプーの潤滑でもどかしいくらいに優しかった。健志の体毛が、さざ波のうねりに細く鋭い波頭を描く。なんのことはない。桃子は主人の腕を借りてオナニーをしているようなものだった。

性愛の悦びをろくに知らない少女をマゾ牝奴隷に調教しようとしている若い主人は、桃

子の反応をしばらく冷静に観察していた。それから、おもむろに尻を引っぱたいた。

「誰がマンズリをしろと言った。タワシが当たっていないぞ」

はっと、桃子は我にかえった。腰を引き、健志の腕におおいかぶさるようにして恥毛を擦りつけた。苦勞してバランスをとりながら、タワシを腕に沿って上下させた。

「あっ……」

今度はクリトリスが、もろに刺激された。桃子は動きを止めて、健志の肩にすがりついた。

「いい加減にしろ！」

健志は股間をくぐらせた右手で桃子の尻肉を鷲掴み、左手で乳房を握りつぶした。

「い、痛い痛い……」

笞痕を責められて、桃子は悲鳴をあげた。幼い官能にたゆたっていただけに、落差が大きかった。

「冴子、このガキに教えてやれ」

冴子が湯から出て、桃子の後ろに立った。「気持ち良くご奉仕するのは大切なことよ。でも、それでご奉仕をないがしろにしては駄

目。身体をすこし右へ傾けて。健志様の背中を見ながら、やっごらん。そうじゃない。もっとお腹をくっつけるくらいにして」

冴子は桃子の背後から手を添えて、タワシ洗いをコーチした。しかし、面積の小さなタワシを腕に密着させれば、クリトリスもいっしょに当たってしまう。しかもタワシが柔らかすぎるので、恥骨を押しつけるくらいにしないと、ろくに泡立たない。どうやっても、クリトリスを強烈に刺激する結果になった。

「もうやめろ。湯冷めしてしまう」

健志は桃子をバスルームの隅に追いやった。「今夜は冴子にやらせる。おまえは、見学のやりなおしだ」

冴子が健志を洗い終わるまで、桃子は下半身を泡だらけにしたまま、惨めな思いで正座していなければならなかった。濡れた身体が冷えていったが、もちろん湯冷めへの配慮などは無視されていた。

もっとも、この冬をとおして、ついに桃子は風邪を引かなかった。気の緩みが風邪の原因だとしたら、恐怖と羞恥の極限に晒されつづけた桃子には、風邪を引く暇すらなかった

のだろう。

ほとんど気を失ってしまいそんな恐怖に震えながら、桃子は反省会の場に座った。今夜は絶対に自分が罰を受けると信じていた。三角木馬の上でひと晩放置される苦痛は、桃子の想像を絶していた。それとも、もっと酷い目にあわされるのだろうか。

反省会でまっ先に名指しされたのは、やはり桃子だった。昨夜のように冴子の告発を認めるのではなく、みずから罪を白状しなければならない。

「わ、わたしは……」

桃子の唇がわなないた。自分は何も悪いことはしていない。失敗するように仕組まれた罠にかかっただけだと、桃子は知っている。それを罪と認めて、みずから懲罰を望むなんて、屈辱的なんて簡単な言葉で表わせるものじゃなかった。

「油の温度管理を間違えて、天麩羅をうまく作れませんでした。それから……健志様の身体をうまく洗えませんでした。厳しい罰を与えてください」

やっとの思いで言い終えてうなだれた桃子だったが、冴子の声でふたたび顔を上げざるをえなかった。

「それだけじゃないでしょ。いちばん重い罪を隠しておくつもりなの？」

「あの……」

冴子が何を告発するつもりなのか、桃子は混乱する思考を必死で追った。事務室での出来事を思い出した。

「ごめんなさい。忘れていました。オシッコを我慢できなくて、バケツの中にしてしまいました。でも、お義母様の許可はもらっていました」

「私を引き合いに出して罪を逃れようとするの？ その根性から叩きなおしてやる必要がありそうね。でも、もっと重い罪があるでしょ」

「……………」

桃子は、完全に言葉を失った。冴子の意図がわからなかったし、何を言っても反抗と決めつけられるおそれがあった。

「おまえ、ウンチをしていないでしょ」

(……?)

どうして、それがいちばん重い罪になるのか理解できなかった。

「便秘はお肌の大敵でしょ。殿方のために自分を美しくたもつ努力を放棄するのは、家事を怠けたりするより、ずっと思い罪なのよ」

鞭でさんざん身体を傷つけておいて、便秘の肌荒れに気を配れなんて、ブラックジョークにもならない。

「だいいち、臭いモノを溜めこんだ身体で殿方にご奉仕するつもりなの？」

「そういうことなら、反省会はあとまわしだな」

黒部がシナリオの第一幕を締めくくりにかかった。

「マゾ嫁候補の便秘を、まず解消してやろう」

桃子はサディスト親子に追い立てられて、トイレにしゃがむ破目になった。トイレのドアが閉じられなかったのは言うまでもない。それどころか、いちだん高くなった和式便器に、ドアに向かってしゃがむよう強制された。尿意が切迫していても排泄できなかった桃子だ。こんな姿を晒して便が出るはずもない。本人としては羞恥心を捨てたつもりでいきむ

のだが、恐怖に支配された交感神経が、腸の動きを萎縮させてしまう。

「どうしても出ません」

三人の見物人に向かって開脚した股間を晒しながら、桃子は泣きじゃくった。

「頑張れば、必ず出せるよ」

健志の声が優しかった。

「俺たちは女を厳しく躰けるが、できないことを命令したりはしない。できないのは、おまえの努力が足りないからだよ」

努力の足りない分を手助けしてやろうと、健志が言った。桃子はトイレから引き出されて、折檻部屋へ連れて行かれた。

折檻部屋で、桃子はまたしても後ろ手に緊縛された。けっしてさからわないと懇願しても、容赦されなかった。縄と鞭は躰けの基本だと、健志がうそぶいた。

健志の縛り方は、昨夜とは違っていた。背中にまわした手首は二の腕が水平になるあたりで吊られて、胸も乳房の下を縛られたただけだった。ずっと楽だった。まさか朝まで縄がほどかれないとは、そのときの桃子は知らなかった。

コンクリートの洗い場は、中央に五十センチ四方の排水口がある。格子蓋をはずすと、深いマスになっていた。桃子は、そこにしゃがまされた。

健志がホースを手にして桃子のうしろにまわった。ホースには、先端が細く丸まった金属のノズルが取り付けられている。

冷水を浴びせられるのだと、桃子は思った。

黒部が正面から桃子の肩を押さえた。その直後、肛門に異様な感触を受けて、桃子は悲鳴をあげた。

「や、やだ……痛い！ やめてえ！」

尻を振って苦痛から逃れようとしたが、ノズルはあっさり桃子の肛門を貫いた。

「苦しいのを我慢しなくちゃ便秘は治らないよ」

冷たい奔流が腸を圧迫した。桃子はようやく、健志の言う「手助け」の意味を理解した。

冷水が渦巻きながら腸をさかのぼっていく感覚が、はっきりわかった。妊婦のように膨れていく自分の腹を、桃子は恐怖に駆られて見守った。黒部に頭を押さえられているので、顔をそむけることもできない。

「く、苦しい。おなか裂ける……許して……」

「まだ一リットルだ。最初でも二リットルは入れるぞ」

ホースの根元にある水量計を見て、健志が無慈悲に宣言する。

腸内洗浄では、成人へ二リットルの注入は普通である。しかし、刺激の少ないぬるま湯を時間をかけて注入されるのである。そんな経験のまったくない少女に真冬の水道水を短時間に二リットルも注入するのは、完全な拷問だった。

宣言どおりに二リットルに達して、水道のコックは閉められた。が、ノズルはそのままだった。ノズルは根元にかけて太さを増しているが、最後は細くくびれて、刀の鏢のような板で終わっている。桃子の肛門はノズルのくびれを啜えこんで、しかも鏢を強く押し付けられて、便の出口は完全にふさがれていた。

「ウンチが出ちゃう……ウンチさせて……させてください」

「どうしようかな」

健志に、まだ排泄を許すつもりがないのは明らかだった。

「ウンチをさせてくださいとお願いしているのは誰かな？」

「……………」

昨夜のバスルームで黒部に言われた言葉を、桃子は思い出した。言うまで許してもらえない。どうせ言わされるのなら、苦しむだけ損だ。

「マゾ奴隷の桃子です」

その答えは健志を満足させなかった。

「思いあがった返事だな。これくらいの浣腸で泣きを入れておいて、マゾだなんて自惚れるのは、綾香に失礼だぞ」

桃子は何度も言い直しをさせられた。

「健志様とお義父様のマゾ牝奴隷にさせていただきたい、未熟で根性無しのくせに淫乱な小娘の桃子です」

そこまで言わされて、やっとノズルから解放された。凄まじい水音とともに、いくつもの塊が排水マスの底へ飛び散っていった。

排泄が終わって、軽い虚脱に桃子はとらわれた。女の子として、これ以上はない恥ずか

しい姿を晒してしまっ、なにか吹っ切れたような気分だった。マゾ牝奴隷への引き返せない道に踏みこんでしまったのだと、桃子は信じた。

桃子は間違っていた。虚脱感は排泄の原初的な快感にともなうものでしかなく、恐怖と苦痛からの解放と屈辱感が重なって、現実逃避に似た感情が生み出されたにすぎない。

桃子の間違いは、もうひとつあった。浣腸責めは、まだ終わっていなかった。

「たくさん出たね」

言葉とともに、またノズルが押し当てられた。

「まだウンチが残ってないか、たしかめてみよう」

「……………」

桃子は悲しそうにうなだれただけで、ノズルから逃れようとはしなかった。

今度は三リットルを注入され、身分を確認する言葉を繰り返させられた。

素直に身分を認めたご褒美として、懲罰は免除された。実際のところ、笞打ちで傷ついた肌に連夜の弄虐を加えられては、十代の旺

盛な回復力でも追いつけない。桃子の身体を気づかって——というよりは、つぎの夜に幼い柔肌の責め心地を堪能するために、今夜は苛酷な責めを控えると、最初から決められていたのだった。

しかし、このサディスト親子は、肌を傷つけない責めについては手加減するつもりはなかった。大量の水浣腸だけでも、昨夜はじめて縛られ笞打たれて破瓜を強制されたばかりの少女にとっては厳しいものだったが、これは下準備にすぎないのだった。

桃子は後ろ手に縛られたまま、二階へ引き立てられた。股間を縄で撻られることもなかったし、マゾ牝奴隷として被虐を受け入れる覚悟も固めたつもりだったから、おびえはなかった。

（SEXって、二回目からは気持ち良くなってくるっていうけど？）

けっして期待しているわけではないが、そんなことまで考えてしまった。

「胡坐を組んで床に座れ」

健志の寝室で最初に命令された言葉が、そ

れだった。素っ裸で胡坐を組めばどうなるか、ちらっと考えないでもなかったが、桃子はためらわなかった。もっと恥ずかしい姿をいっぱい見られている。それに、命令なのだから従わないわけにはいかない。

健志は桃子の右足首を引き上げて、左の太腿の上に乗せた。左の足首は右脚の下をくぐらせて、同じように太腿の上へ引き上げた。結跏趺坐。いわゆる座禅の正しい座り方である。

無理に開かされた股関節がすこし痛んだが、我慢できた。足の裏がま上を向いているのが、桃子は自分でも不思議だった。

「こうすると、自分ではほどけなくなる」

しかも、重ねた足をさらに縄で縛った。桃子の上体を前へ押し倒しておいて、足を縛った縄を肩越しにまわして手首の縄につないだ。桃子は上体も起こせなくなった。

「もっと身体を折って縛ると海老縛りという拷問になるが、これくらいなら苦しくはないはずだ」

「はい、だいじょうぶです」

床に座るように言われたときは、また痛い

目にあわされるのかと警戒したが、そうではないらしいと安心して、桃子は素直に答えた。

「苦しくはないが……」

肩を押されて前へつんのめった。頭を床へつけられると、起き上がれなくなった。

「前も後ろも丸見えになる」

高く持ち上がった股間に健志の熱い鼻息がかかって、桃子はぴくりと肩を震わせた。健志の視線は感じるが、姿は見えない。スイートルームであお向けになって自分で脚を開いたときより恥ずかしかった。そして、あのときとは違う肉体の変化が生じ始めたのに気づいた。さわられてもいないのに、熱く潤ってきたのだ。

「手間のかからない身体だな」

肉壺に指が穿たれた。

「あふ……」

つるっと指が侵入すると同時に、花卉の外側が掌で包まれた。

「ひゃん、ん……」

別の指に肉芽を軽くつままれて、桃子は鼻にかかった悲鳴をこぼしてしまった。指が桃子の中で縦横に動き、しだいに湿った音を立

てはじめた。

「あ……やだ。あ……」

昨日からの屈辱も、父親に殺されかけた絶望的な恐怖も、この瞬間には忘れていた。もどかしい思いだけが、桃子を苛んでいた。この快感がずっと大きく膨らんで破裂するのを「いく」というのだろう。だが、自分の指でクリトリスを刺激しても、この先へは達したことがなかった。女にされた今も、その相手の男に愛撫されながら、限界は越えられそうもなかった。

指が引き抜かれて、男が身体からはなれた。

「やだ、もっと……」

ご機嫌をそこねたら無慈悲な懲罰を与えられかねないことも一瞬忘れて、桃子は愛撫をねだった。

かわりに。苦痛をともなう異物感が股間に突き立てられた。

「ん……む、む、ん……」

昨夜のような激痛こそなかったが、よりいっそうの膨満感があった。犯されているという自覚が、桃子を過敏にさせてもいた。腰を抱えられて律動を送りこまれるたびに、桃子

は呻いた。呻きながら、しかし快感は遠ざかっていった。

縛られ、羞恥の源をさらけ出し、そこを突きあげられる惨めさだけがつのっていった。乾いていく感情とは裏腹に、ますます分泌物をあふれさせていく自分の局部が恨めしく思えた。

やがて。昨夜も感じた怒張の瞬間的な肥大と痙攣。子宮口に浴びせられる精液の熱ささえ感じられるようだった。

「ふん……？」

まだ二十代半ばでも、女性経験は濃密な十年を誇る健志である。桃子の褪めた反応を見逃すはずはなかった。が、それは後日の課題に残して、寝室のドアを開けた。

首を横にねじ曲げられた桃子の視界に、黒部のスリッパが見えた。

「なんだ、親父か。こんな時間に、なにか用でも？」

健志が、シナリオを新たなページに進める台詞を桃子に聞かせた。

「わしとおまえは、冴子も綾香も共有してきたな？」

これも、桃子に聞かせる台詞。

「桃子だけ例外ってこともないだろう。わたしにも抱かせろ」

「いやっ！」

黒部の台詞を理解して、桃子は叫んだ。

「いやだ。クロブタ……」

心の中でずっと呼んできた名前を叫びかけて桃子は、はっと口をつぐんだ。が、遅かった。

「ん？ クロブタだと？」

聞きとがめた黒部の顔が赤黒くなった。子供の頃に、そのあだ名でからかわれた記憶がよみがえったのだった。

「黒部をクロブと読んで、クロブタ。そうだな？」

髪をつかんで桃子を引き起こし、顔をのぞきこんだ。

桃子はすくみあがった。黒部は本気で怒っていた。

「あ、あの……ごめんなさい。もう言いません」

黒部の詰問を肯定する謝りかただった。

「男を侮辱するのは、最大級の犯罪だ。しか

も、おまえの義父だぞ」

今すぐ罪を償わせてやると健志が言った。

「まあ、待て。昨日の今日では、いくら若くても身体がもたん。今夜の処刑は許してやろう」

罪滅ぼしの意味も含めて桃子を抱かせろと、黒部が話を戻した。

「親父と穴兄弟か。それは、ご免こうむりたいな」

健志は父親にさからってでも自分を守ってくれるのだと、桃子は単純に信じた。彼が命の恩人だったことを思い出して、ほとんど恋愛感情さえ芽生えかけた。しかし、つぎの健志の言葉は、そんな甘ったれた思いを粉碎するに十分な破壊力を持っていた。

「親父にはアナルを進呈するよ。前のバージョンは俺、後ろは親父。公平ってもんだろ」

ボーイズラブ小説を何冊か読んでいる桃子だった。健志の言葉の意味は、誤解しようもなかった。

「やだっ！ クロブ……黒部さんとアナルセックスだなんて、いやです」

桃子は、スリッパしか見えない相手に向か

って、必死に懇願した。

「健志様になら、なにをされてもいいです。アナルも捧げます。鞭でぶたれても、三角木馬に乗っても……命令には服従します。でも、黒部さんとは、いや……絶対にいやっ！」

昨夜は黒部に秘芯をくじられている。浣腸から排便まで見られている。それでも、黒部に肛門を犯されるのは耐えられなかった。生理的な嫌悪だけではない。父親を追い詰めた張本人、自分が殺されかけた原因を作った相手なのだ。

健志がクロベ・ファイナンスの専務として社長の意に沿った動きをしていたとは、桃子は考えてもいなかった。黒部は自分を惨めな境遇に追い落とした仇敵で、健志は命の恩人、そして桃子の最初の男なのだった。そうとでも自分を騙して、健志にすがりついてなければ、桃子は正気をたもってられなかったのかもしれない。

「俺の命令に絶対服従するんだな？」

健志はツインテールをひとまとめにつかんで、桃子を引き起こした。

「それじゃ、命令する。親父にアヌスをおかわ

いがってもらえ」

桃子をあお向けにひっくり返した。結跏趺坐を組んだままの股間が、天井に向かって剥き出しにされた。女にされて二度目の務めを強いられたそこは、おびただしい白濁で埋められていた。

黒部は剛直を桃子の花芯にすりつけて、嫁の蜜と息子の白濁にまみれさせた。

息子に負けないサイズと硬度を持ったそれが、双丘の奥でわななく蕾に押し当てられた。「やだ、やめてよ。おまえなんかに……やあっ、痛い、痛い！」

桃子の罵声が悲鳴にかわった。

「口を開けて、息を吐き出せ」

苦痛から逃れたい一心で、少女は仇敵の言葉に従った。息を吐いて力が抜けるタイミングを狙って、黒部の凶器が少女の体内へ一気に押しこまれた。

「うあああっ……！」

昨夜のそれを数倍にもした先鋭な苦痛に、桃子は悲鳴をあげた。

黒部が腰を動かすたびに、真っ赤に焼けた鉄棒でえぐられるような痛みが繰り返された。

黒部の体重をまともに受けて押しひしがれる腕の痛みが、そこに加わった。

「ううむ。さすが……締め付けよる」

黒部はすぐに果てた。

本能のおもむくままに、幼い少女の体内に欲望を撒き散らしながら、ふたりのサディストは冷静だった。桃子の精神が崩壊の寸前まで追い詰められているのを見て取り、後始末までは要求しなかった。しかし、桃子の後始末もしなかった。桃子の上半身を折って肩越しに固定していた縄だけはほどき、かわりに首に縄を巻いてベッドの足に結び付け、その夜の陵辱劇に終わりを告げた。

黒部は自分の寝室に戻り、健志は桃子の目の前でベッドに寝転がった。後ろ手に緊縛され結跏趺坐を組まされたまま、桃子は床の上に放置された。やがて、少女のすすり泣く声に、若いサディストの満ち足りた躰が重なって、夜は更けていった。

そうして、三日目の朝が桃子に訪れる。

まだ窓の外が暗いうちから、冴子にビンタを張られて目覚めさせられた。欲望の痕跡が

こびり付いた身体をバスルームで洗い、身支度をととのえた。といっても、髪を簡単にブラッシングしてツインテールのリボンを結び、前掛けタイプのエプロンを身に着けただけだ。

朝の排泄は事前に許可されていると教えられて、桃子は普通に用を足すことができた。昨夜さんざん刺激を受けたせい、少量だが排便もあった。ウォシュレットを前後とも必ず使うように言われて桃子は意外に感じたが、なんのことはない、男の指を汚さないためだと説明された。最後にトイレットペーパーでぬぐって、それを目の前で開いてみた。桃子が恐れていた出血の痕跡はなかった。

食事の支度をのぞけば、黒部親子の朝は、世間一般の亭主より手間はかからないといえるだろう。その日の気分と仕事の内容で適当に着るものを決めて、さっさと自分で着替えてしまう。

頭が仕事モードになっているらしく、女をかまうことも滅多にない。食事のあとは、他の社員がいるところでは話せないような打合せを事務室でしながら、用心棒の社員が来る

のを待つ。冴子はリビングルームでモーニングショーにチャンネルを合わせ、綾香がキッチンを片付ける。桃子には、靴磨きの仕事が割り当てられた。

靴磨きは、これまで冴子の仕事だったという。水仕事よりは、ずっと楽だ。しかし、股間をわずかに隠すエプロンだけを素肌にまとった少女が広く豪華な玄関にうずくまって靴を磨いている光景は、ふた晩にわたって繰り広げられた陵辱シーンより、ある意味ではよほどアブノーマルなものであった。

九時前に用心棒の社員が姿を見せた。今日は坂本という男だった。女三人と坂本が玄関前に並んで、黒部親子の車を見送った。

桃子は事務室へコーヒーを運んで、笞痕の癒えた尻を軽く撫でられた。

綾香と桃子は残飯で食事をすませて、掃除と洗濯。Tシャツ一枚で自転車に乗る綾香の買出し。昼食と昼寝。そして夕食の支度。冴子に苛められることもなく、桃子の半日は無事に過ぎた。

残る半日は、もちろん無事に過ぎるはずがなかった。

まだテーブルの準備も終わっていないうちに、健志がひとりで帰ってきた。冴子にも不意打ちだったらしく、ばたばたと出迎える。

桃子は、いきなり折檻部屋へ連れて行かれた。いったい何をされるのかと、桃子は蒼ざめている。

「そうおびえるな。いろいろと小道具が揃っているから、ここにしただけだ」

部屋の隅の固いベッドに仰臥させられる桃子。ベッドの四隅に鎖でつながれた枷で手足を大の字に拘束された。

健志は上着を脱いで、桃子の横に腰かけた。「おまえは、感じやすい身体をしているな」

桃子の唇を指でなぞった。口に入れて舌を弄びながら、一方の手で乳首に触れた。つかんだり抓ったりではなく、やさしい愛撫だった。

「あ、ん……」

桃子が切なそうに声を漏らした。

健志は両手で乳房を揉み、指先で乳首を転がす。

「や、やだ……」

じわっと湧き起こる官能の波に桃子がうろ

たえる。

「心配するな。今は痛いことはしないから。
気持ち良いことだけをしてやる」

健志の右手が、少女の腰をわずかに隠すエプロンの下にもぐった。

「ひゃ……ん……」

肉芽に触れられて、また桃子の声がこぼれた。

乳首に触れたよりも、もっとやさしく。健志の指は宙に浮かびながら、ずっと先端を掠めて過ぎる。そのたびに、心地よいショックが下半身を走る。

つぶっと指でえぐられて、桃子の可愛い悲鳴に艶が増す。

指の動きが奔放さを加えると、桃子の喘ぐ息もせわしなくなる。しかし、官能の波は大きくなうねりには育たず、腰のどこかで消えていく。

健志は右手を桃子の腋に這わせ、桃子がくすぐったがると脇腹から腰を掌で撫でていき、太腿から尻へとさまよわせる。健志の仕草は、身体を合わせて間もない恋人の性感帯を探り当てようと懸命の努力をつづける若い男のそ

れと変わりはなかった。

しかし、健志の指では未開発の少女を山裾から追い上げることはできそうになかった。

不意に指がはなれた。

「やだ……え、なに？」

無意識にあげた不満の声が、小さな驚きで中断された。桃子は、乳首に冷たいものが触れたのを感じた。目を開けてそこを見ると、小さな卵のようなピンク色の物体が乳首の上に立っていた。

(すごいって、聞いたけど?)

女性向けのコミック誌にはピンクローターやバイブの写真まで載っている。

「知っているようだな。経験もあるのか？」

桃子は、ぶんぶんと頭を横に振った。ローターを使うような女の子じゃないと、健志に訴えたかった。

「ふふん」

はたして、健志は満足そうに鼻を鳴らした。

ブブブブブ……

ローターが振動を始めた。

「ひゃ……きやふっ！」

快感よりは、くすぐったさのほうが強かつ

た。身をよじってのがれようとしたが、大の字に拘束されていては、動ける範囲は限られている。健志はリモコンを持った左手で桃子の胸を押さえて、宙に浮かした右手を微妙に動かした。

「ひゃっ……やだ。やめて……」

軽く触れられると、くすぐったいだけだ。強く当てられると、小さい針を打ちこまれているみたいな不快感があった。

刺激がクリトリスに移ると、もっとひどくなった。息が詰まるほどくすぐったいか、呻いてしまうくらい痛いか、そのどちらかだった。それでいて、乳首もクリトリスもはちきれそうなくらいに勃起して、とめどもなく潤う。

「なるほどね」

桃子が身悶えるのを見おろして、健志はひとり合点する。桃子の拘束をといて床におろし、両手をベッドにつかせた。太腿をつたい落ちる蜜をローターに塗りつけ、それを肛門に押しつけた。

「そこ、やめて！」

「親父よりは楽だぞ。力を抜け」

少女の抗議には耳を貸さず、ローターを押しこんだ。靴下留めのようなベルトを桃子の太腿に巻きつけ、そこにリモコンを挟んだ。

健志は自由になった両手で桃子の腰を抱えて、背後から一気に貫いた。

(もうすぐ終わりだ)

結合を受け入れて、桃子はほっとした。中途半端な快感にじらされるより、さっさと解放してもらったほうがありがたかった。

(だけど……二回目は痛くなかった)

三回目は気持ち良くなるのだろうか。男に協力して尻を突き出した姿でピストン運動が始められるのを待ちながら、そんな期待もすこしあった。

しかし、●校生の頃から女を弄んできた二十六歳のサディストは、●四歳の少女が考えもしなかった行動に出た。

「もっと前へ倒せ」

両手に体重がかかる姿勢にさせると、桃子の太腿を自分の腰の上に抱え上げた。桃子の足が床からはなれた。

「きゃ！ な、なに？」

太腿を水平に持ち上げられたまま、桃子は

後ろに引っ張られた。

「ベッドからおろすぞ。手を踏ん張れ」

桃子は健志と結合したまま、床に手をついた。

健志が横に動いて、ふたりの向きを変えた。

「なにをするんですか。こんなの、やめてください」

ぴしゃりと尻を叩かれた。

「甘やかしてれば、凶に乗りやがって。女が男に指図するつもりか。身体に教えないと覚えられないようだな」

三回目への淡い期待など、吹っ飛んでしまった。桃子はあわてて謝った。

「ごめんなさい。もう逆らいません。許してください」

こたえるかわりに健志は、ローターのスイッチを入れた。

「う……」

体内であればはじめたローターが、健志の缶コーヒーを詰めこまれてぎちぎちになった部分を刺激して、桃子は呻いた。快感ではなかった。苦痛とも違う。不快とも言いきれない。大小の排泄を限界まで我慢したときの感

覚に、すこし似ていた。

ずん、と健志が腰を突いた。桃子はつんのめりかけて手を前へ運んだ。また突かれて前へ進む。

「これがほんとうのチンチン電車だな。出発進行」

折檻部屋のドアのところまで、桃子は這わされた。だが、終点ではなかった。

「坂本にも見せてやろう」

ドアを開けて、健志が恐ろしいことを言う。「やだ……あ、命令には服従します。でも、恥ずかしい」

こんな破廉恥な姿は初対面の男どころか、綾香にだって絶対に見られたくはない。でも、命令に逆らった罰が、もっと怖かった。追い詰められて、桃子は泣くしかなかった。泣きながら、廊下を這った。かすかな快感は、とっくに消え失せていた。

「へええええ。専務もやりますね。手押し車ってんでしょ。実演を見るのは初めてですよ」

坂本は目を丸くして驚き、羨ましがった。健志にけしかけられて桃子の尻肉を開き、リモコンのリード線が埋没している部分までた

しかめた。

桃子は静かに泣きじゃくりながら、いっさいの抵抗も抗議もあきらめて男たちに馴られるままになっていた。

その夜、桃子は夕食を抜かされた。健志を怒らせたのだと、桃子は思った。

男の場合は食欲が満たされると、つぎは性欲の番だが、女は違う。食欲と性欲が同居しているというべきか、空腹のほうが性欲は強まる。食事を抜かれたという意識は、被虐感をあおる効果もある。桃子の調教にいつその拍車をかけようという目論見だとは、少女に想像できるはずもなかった。

空腹と、またタワシ洗いをしくじって叱られた口惜しさとをかかえて、反省会にのぞまねばならなかった。

いや、反省会ではなかった。桃子の裁判だった。

「覚悟はできているだろうな」

黒部にいきなり言われて、桃子はきよとんとした。

「昨夜だ。わしのことを何と言った？」

「あ……」

黒豚顔と言いかけて、聞きとがめられたのだった。

「でも、あれは許してくれたじゃないですか」

「すぐの処刑は許してやると言っただけだぞ」

「でも……あの……」

正確に黒部がどう言ったかなんて、覚えていない。

「主人の親をクロブタなどと侮辱しておいて、無事にすむとでも思っていたのか」

すごまれて、桃子は震えあがった。徹夜で三角木馬に放置された綾香の姿を思い出した。きっと、あれ以上の罰を受ける。

「しかも、まったく反省していない。あの後も親父のことを『おまえ』と言ったな」

言葉づかい全体がなっていないとも、健志は言った。

「やだ。やめて。許して。禁句のオンパレードじゃないか。ボーイフレンドに甘えてるつもりか」

きちんと教育したのかと、矛先を冴子に向けた。

「必ず敬語を使うように教えました。殿方の

行為を否定する言葉が許されないことも教えてあります」

冴子の教育を無視して男にタメグチをきき、そのうえ義父を侮辱した。極刑に値すると、黒部が論告を終えた。

「しかしな、親父。こいつにも情状酌量の余地はある」

「甘やかすと、つけあがるだけだぞ」

「俺の命令なら、なんでもきくと誓った」

「マゾ牝奴隷なら当然だ。それに、わしの命令には逆らうというふうに聞こえるぞ」

「それは、これから躡けていくとして。俺の命令なら三角木馬に乗ると言った。鞭でぶっつけてくれとも言った。そうだな？」

黒部にアナルを犯されたとき、健志に助けを求めた。なにを言ったかなんて、覚えていない。でも……

「はい、言いました」

ほかの答えは許されていなかった。

「そういうことだ。こいつの希望をかなえてやろう。木馬の上で鞭百発。ついでに、針の味も教えてやるかな」

「い……」

いやと叫びかけて、かろうじて桃子は言葉を飲みこんだ。

じっとしていれば性器は傷つかないと、冴子が言った。そして、鞭打たれると自然に身体が跳ねてしまうのを、すでに桃子は知っている。

桃子はふたりの前に土下座した。

「わたし、未熟で根性無しだから、木馬の上であばれてオマン●が裂けちゃいます」

せめて別々にしてくださいと、桃子は必死に懇願した。

「だいじょうぶだよ」

健志の猫なで声。

「形成外科に知り合いがいる。裂けたら、今よりもきれいに縫ってやるよ」

土下座した桃子の肩が震えはじめた。ツイントールを手綱のようにして引き起こされたとき、桃子の顔は蒼白だった。

桃子は黒部親子に両側から抱きかかえられるようにして、折檻部屋へ引きずっていかれた。

天井の滑車から垂れたフックに、手首を縛った縄が引っ掛けられた。小さな力で犠牲者

を吊り上げられるよう、滑車は大小の組み合わせになっている。大きな滑車に巻きつけられた細い鎖を健志が引くと、フックのついた太い鎖が小さな滑車にすこしずつ巻き取られていく。

桃子の裸身が高く吊り上げられ、木馬の背中にじわじわと下ろされていく。三角のクサビに太腿が割り開かれたところで、健志は鎖をとめた。

「役立たずなタワシは無くしておこう」

使い捨てライターを取り出して、桃子の股間に近づけた。

「きゃああっ！」

炎の長い舌にあぶられて、桃子は悲鳴をあげた。たんぱく質の焦げる臭いが鼻をついた。炎はすばやく股間を撫でただけで、桃子は火傷を負っていない。だが、恥毛を燃やされたショックは大きかった。

「明日からは、へたくそなタワシ洗いを免除してやる」

黒部が短く舌打ちをした。もっと念入りに桃子を虐める計画だったのに、新鮮な生贄に興奮した息子の性急さがシナリオを狂わせた

ことへの不満だった。

「出血したとき、このほうがわかりやすいと思うぜ」

半ばは桃子への威嚇、半ばは父親への弁解を口にしながら、健志はとめていた鎖を手にした。じわっと桃子の身体が下がった。クサビの稜線が股間に触れた。それだけで桃子は悲鳴をあげた。

「ひいっ……！」

ライターに焼かれて飾りを失った花芯に稜線が埋没した。桃子を吊るす鎖が、さらにじりっとゆるめられた。

「い、痛い！ 痛い！ 許して……くださらないんですね」

許しを乞うことすら禁じられていたのを思い出して、桃子は言葉をごまかした。

「わかりきったことを聞くな」

ゆるめかけていた鎖をじわっと引き戻して、健志が言った。桃子の身体が五ミリほど浮いた。桃子にとっては大きな五ミリだった。激痛がすっとやわらいだ。

「おしゃべりをしている暇があったら、いい声で鳴いてみろ」

言い終わると、健志は鎖を手からはなした。

「ぎゃあああっ！　うあああっ！」

わずかでも引き上げられていた分、落下の衝撃があった。桃子は獣じみた声で叫んだ。鎖にすがって身体を引き上げようとしたが、鎖は無慈悲に繰り出されるだけだった。両手が木馬についた。桃子は身体を前へ倒して、体重を腕でささえた。

「はあ……ふう……」

桃子は肩で息をしながら、わずかな安息をむさぼった。それも束の間。また鎖が吊り上げられていく。桃子は両腕に渾身の力をこめて、すこしでも股間を浮かそうと頑張った。

「強情を張っていると、あとで後悔するぞ」

じきに腕が痺れて、体重をささえられなくなる。腕を伸ばして鎖に吊られているほうが負担は小さくなると健志が教えた。しかし、自分の意思で股間に体重を乗せるなんて、とても桃子にはできなかった。

「おまえは甘すぎる」

桃子の腰を、黒部が背後から両手でつかんだ。

「あとではなく、今すぐ後悔させてやる」

黒部は桃子の腰を木馬に押しつけて前後に揺すぶった。

「ぎゃあっ……や、やめ……ひいいっ！」

股間を切り裂く凄絶な痛みに桃子は泣き叫んだ。

「そら、さっさと手を伸ばせ」

「や……あああああーっ！」

長い悲鳴の果てに、桃子は屈服した。涙に濡れそぼった顔を激痛にゆがめながら、腕を頭上へ伸ばした。鎖が巻き上げられ、わずかに張った位置で固定された。

「もう……もう、やだ」

鎖に吊られたぶんだけ痛みがやわらぐと、思考と感情がよみがえった。このままで鞭打たれることを思い出し、恐怖に心がすくんだ。しかし、まだ忘れていたこともあった。

「よく我慢したな」

ご褒美だと言わんばかりに、健志は桃子の乳房を揉んだ。股間に先鋭な苦痛を感じながらも、リズムカルな刺激に反応して、乳首が顔をのぞかせた。指のあいだでしばらく転がして手ごろな大きさにしてから、健志は乳首をつまんだ。綾香に命じて、小さな箱を持つ

てこさせた。

「鞭で痛めつけたあとでは、さすがにかわいそうだからね。こっちを先に教えてあげよう」

小箱が開かれると、アルコールの臭いがした。頭に丸いツマミのついたマチ針が、脱脂綿の上に並べられていた。

健志はその一本を取り上げた。

「いやだなんて言うと、針を増やすぞ」

喉からほとぼしろうとしていた悲鳴は、健志の嚇しに封じられた。

「泣いたり動いたりしなかったら、一本ずつで許してやる」

注射針より細いのがだから我慢できるはずだと、健志がうそぶく。

乳首へのマチ針と腕への注射では比較にならない。しかし桃子には、抗議も許されていない。健志の残虐な責めを甘受するしかなかった。桃子は目を固く閉じて、歯を食いしばった。

鋭い痛みが乳首を貫いた。黒く閉ざされた視野を閃光が走った。

「ん……んっ！」

肺から逆ろうとする息をかりうじて堰き止

めて、桃子は耐えた。股間が傷つくのを恐れて、身悶えすら気力で抑えた。

「ふふ。頑張るね」

健志が反対側の乳房を揉んだ。桃子の意思に反して、乳首が受虐の態勢をととのえる。再び針を突き刺されて、桃子の全身が硬直した。

針の痛みは、刺された瞬間がいちばん大きい。すぐに痛みは引いて、痺れるような感覚が残る。拷問を耐え抜いたと、桃子は安堵した。

「その調子だ。あと一本で終わるぞ」

(え……?)

桃子は目を開けて、おびえた表情で健志の顔を見た。

「でも……一本ずつって？」

逆らえば針を増やされると思いながら、それでも訊いてしまった。

「そうだよ。一本ずつだ。右に一本、左に一本。つぎは、まん中だ」

健志の右手が股間に伸びた。木馬の頂点が食いこんだ亀裂の、その合わせ目を指がまさぐった。

「い……」

いやという言葉を読みこむのに、とほうもない努力が必要だった。

「あ……う……」

指に刺激されるたびに、桃子は悲しく呻いた。肉芽がしだいに充血していくのが自分でわかった。自分の心を裏切って反応する肉体が恨めしくなった。

つるっと包皮を剥かれる感触があった。神経が密集する器官が外気に曝される。二本の指のあいだに突起を挟まれて、桃子は息を止めた。

激痛が身体の中で炸裂した。

「ひぎゃあああっ……！」

桃子の身体が木馬の上で跳ねた。腰が浮き、すたとんと落ちる。

「うがっ……ふう」

むしろ気持ち良さそうに息を吐いて、桃子の首がかくりと垂れた。

今の桃子に唯一残された安息の領域には、しかし長く逃げこんでいることは許されなかった。アンモニアの刺激臭に鼻を焼かれて、桃子は現実世界に連れ戻された。

「これからが本番だぞ」

桃子の目の前にバラ鞭が突きつけられた。今夜は作法どおりに自分で数えろと、宣告された。間違えれば、最初から数えなおさせられる。

桃子の視界から健志の姿が消えた。その直後に背中を打たれた。

ばしっ。

脇腹から背中にかけて痛みが走った。息が詰まりそうになったが、一昨夜の細い笞よりは痛くなかった。

「ひとつ……」

最初の数を声にだしながら、桃子はすこしだけ安心していた。

背中を五発打たれて、そのつぎは尻を打たれた。打撃の一部が木馬にそらされるので、鞭の傷みは軽かった。だが、腰を揺すぶられるのが辛かった。

桃子が十発を数えおわったところで、健志が正面にまわった。乳房と腹を交互に打たれ、二十発目は木馬すれすれに股間を打たれた。

「に、にじゅう……」

百発なんて、やっぱり耐えられない。最初

のかすかな安心は、もう消えていた。あと十発くらいなら、我慢できると思った。でも、どこかで泣いてしまう。冷静に数えてなんかいられなくなる。

ばしっ。

「にじゅうい……」

ばしっ、ばしっ、ばしっ。

数え終わらないうちに往復で鞭打たれて、桃子は混乱しかけた。

「……いち、にじゅうに、にじゅうさん、にじゅうよん！」

肺から息をしぼり出して鞭に追いついた。

三十を数えたときにも、桃子はまだ耐えていた。正確に数え、身体は動かさないよう気をつけていた。

四十を越えたあたりで、悲鳴と嗚咽が混ざりはじめた。

五十の折り返し点を過ぎると、鞭に反応して身体がのけぞった。そのあとを、股間をえぐられる悲鳴が追いかけた。太腿を鮮血がったい落ちた。それでも、うわ言のように数だけは数えつづけた。

しかし、七十を数える声はついに桃子の口

から発せられなかった。

健志はいったん手を止めたが、桃子が泣きじゃくっているのを確かめると、再び鞭を振り下ろした。

桃子が完全に気を失うまで、処刑はつづけられた。

木馬からおろされた犠牲者の股間を、冴子が調べた。看護師の免許は持っていないが、外傷の手当てについては経験を積んでいる。

黒部にマゾ性を引き出されるまで、冴子はレズの女王様を仕事にしていた。縛りよりは鞭、鞭よりは針、針よりは刃物が好きという、物騒な女王様だった。

そんな彼女から見れば、桃子の傷は軽いものだった。傷口に軟膏を塗りこめて、明日ひと晩だけは入浴をひかえれば、それでじゅうぶんだと判断した。

傷の手当てのあと、桃子は折檻部屋の壁に打ちこまれた金属環に手足を広げて磔にされた。三日目の夜も、桃子は厳しく拘束された姿で過ごさねばならなかった。

翌朝、磔から解放された桃子にショーツが

与えられた。傷口からの出血にそなえての処置だったが、ひさしぶりに股間を隠せることが、桃子はうれしかった。靴磨きから夕食の片づけまで日課は変わらなかったが、入浴奉仕は免除された。SEXも強制されなかったが、自分の部屋で眠ることは許されなかった。健志の寝室で後ろ手錠をかけられ、ベッドの脚に鎖でつながれた首輪を嵌められて、床で眠らされた。

「夫婦になるんだから、寝室がいっしょなのはあたりまえじゃないか」

皮肉な口調で健志が言った。許婚者とか新妻ではなくて、牝犬と同じ扱いだと、桃子は内心で反発した。手錠をかけられないだけ、犬のほうがましだった。

五日目から調教が再開された。桃子も綾香と同じようにパイパンでいることが決められた。前だけでなく、肛門のまわりまで含めて自分の手で処理させられたが、その手段は健志の気まぐれでさまざまに変わった。剃刀で剃ったり毛抜きを使ったり、除毛フォームだったり。ガムテープを貼って一気に引き剥がしたときは、苦痛と惨めさで泣いてしまった。

無毛の亀裂を健志に犯され、黒部には菊蕾を貫かれ、日によっては冴子に口唇奉仕を強いられて、綾香とレズまでやらされた。翌朝まで痕が残らないくらいの軽い鞭打ちや緊縛はほとんど毎日だったが、苛酷な懲罰は週に一度くらいだった。

気まぐれで折檻されることも多いと冴子は言ったが、実際のところはサディストなりの配慮がはたらいているようだった。傷が癒えないうちに再び責められることは滅多になかった。

冴子も懲罰の例外ではないと知ったとき、桃子はすこし驚いた。逆さ吊りにされて股間を竹刀で打たれると、さすがに冴子も悶絶した。

「いつも、あたしたちを虐めてるんだ。ざま見ろってもんだ」

綾香は小気味良さそうに言ったが、桃子はそんな気にはなれなかった。綾香が折檻されるときよりも、むしろ強い同情を冴子に対して感じたほどだった。自分を支配する人間が立場を変えると被支配者になるという構図に、桃子はなじめなかった。

そういった桃子の深い被虐の資質を面と向かって指摘したのは、綾香だった。

大晦日の前日、桃子と綾香はいっさいの家事から解放された。休暇が与えられたわけではない。69の格好で向かい合ったままいっしょに縛られて、折檻部屋に閉じこめられた。他の部屋ではクリーニング業者があわただしく大掃除を始めていた。

「あんたのおかげで、今年は助かったよ。雪が降らなかったのも、そうだけどね」

股間に暖かい息を吹きかけられて、桃子は腰をひくつかせた。

「あたしひとりだったし、去年はさんざんな目に合わされちゃった」

桃子がくすぐったそうにしているのを見ると、綾香はぺろんとクリトリスを舐めて小さな悲鳴をあげさせた。

お返しとばかりに、桃子も唇に押しつけられている無毛の亀裂に舌を這わせた。この屋敷に拉致されて以来、自分の意思で性的な行為をしたのは、これが初めてだった。

冴子に仕込まれた舌づかいで、ふたりはじきに喘ぎはじめた。喘ぎながら、綾香が話を

つづける。雪が降った夜は庭で雪に埋められた。クリスマスには、リビングルームでクリスマスツリーにされた。客を呼んでパーティーが催され、そのあいだ動くことを禁じられた。同じ姿勢をつづけることも苦痛だったが、イルミネーションの電球が熱くて、小さな火傷が身体じゅうにできた。

サディスト親子が新しい玩具に夢中になったおかげで、イベントにかこつけた責めをまぬがれたと、綾香が言った。

「だけど、あんたもずいぶんと気にいられたもんだね」

その口調には同情だけでなく、蔑みのひびきがあった。

綾香がはじめて細い一本笞で打たれたのは、黒部邸に来て二か月目だったという。三角木馬は、さらに後だった。最初のうちは縛りとSEXが主体で、だんだんハードになっていった。

「あんたは、いきなりだもんね」

それだけの素質があると黒部親子に見こまれたんだよと、綾香が言った。

「違う。わたし、マゾの素質なんか、ない」

桃子は躍起になって否定した。綾香と違って、桃子にはほかに選べる道がなかった。健志と婚約して結納金の名目で融資をうけられなかったら、父親は何度でも一家心中に走っただろう。

「わたし、死にたくない。生きるためなら、こんな運命でも我慢する」

そういう考え方をするのが、すでに素質だと思いと、綾香が指摘した。桃子は、目の前の無毛の亀裂からぷいと顔をそむけた。

しかし、幼い反発は長くつづかない。執拗に舌で責められると、無反応ではいられなかった。

「まあ、あたしだって素質はあったと思うよ。だって、黒部に見そめられたんだもの」

クリトリスを軽く噛まれて、桃子は嬌声をあげた。攻撃が緩むと反撃に出た。やがて綾香は絶頂をむかえたが、桃子は取り残されてしまった。